

# FELLOWSHIP NEWS

フェローシップ・ニュース

アジア太平洋地域  
アディクション研究所

FELLOWSHIP NEWS

2003年8月1日 発行  
発行定日 毎月1回1日発行

## 祝！ NA50周年！



### Keep coming back , It works!

7月3日から6日にかけて、米国カリフォルニア州サンディエゴにて、NA（ナルコティクス・アノニマス）創設50周年を記念した第30回NAワールド・コンベンションが開催され、人口約20万人の町に世界中から推定5万人近いNAメンバーが集まって、お互いの回復を祝い合いました。

3日夜、大ホールで開かれたメイン・ミーティングでは、スピーカーとなった日本のオールドタイマーが世界中のメンバーから総立ちの拍手で迎えられるなど、今回参加した50名近い日本のNAメンバーにとって忘れられない感激の体験となりました。



#### 目次：

祝！ NA50周年！	1
サンディエゴ日記	2
フェローシップ対談 アディクションの 時代を語る（前編） 斎藤学 & 近藤恒夫	6
「命の洗濯」に 行きましょう ～タイ研修報告～ 和高優紀	14
サルでもわかる アディクション講座	20
ラブ&マーシー 神無月才生	22
「助けてもらう力」 安高真弓	23
アパリ藤岡 アウェイクニングハウス	24

#### APARIの フェローシップへ ようこそ！

APARIとはアジア太平洋地域アディクション研究所（Asia-Pacific Addiction Research Institute）の略称です。

全国のD.A.R.CやM.A.C.の各施設、教育・医療・司法関係者と連携しながら、依存症から回復しようとする仲間たちの手助けをしているシンクタンクです。

## 一挙掲載！ N A 50周年コンベンション参加者の日記を極秘入手！

フェロシップ・ニュース編集部ではこのほど、アメリカ・サンディエゴで7月に開催されたNAワールド・コンベンションに参加した、回復の遅れているある日本人メンバーの日記を入手した。本人の人権に一切配慮せず、ここに全文を公開する。

### 30日 サンタモニカ着。

アメリカは、学生のときにニューヨークやマイアミに行ったきり。あの頃はクスリを散々に使っていた。懐かしいような、怖いような、不思議な感じだ。

今回のコンベンションは、東京Dの施設スタッフや、支援センターの人たちと同行しているから、仕事気分が抜けない。正直言って少し気疲れする。

沢山の人たちに囲まれるとあいかわらず孤独癖が出る。成田空港では大ピンシュクを買った。日本のNAメンバーは施設のスタッフばかりだ。施設に入寮したことがない僕は、疎外感を感じてしまう。なんだか息苦しくなってヘッドホンで音楽を聴きながら北ウィングの売店周辺をフラフラしていた。スポンサーは、僕がいなくなったと知って「あいつ具合悪そうやったから、帰ってしもたんやないか？」と思っただらう。テンパって、空港中に放送を流して僕を探した。ヘッドホンをしている僕に聞こえるわけがない。みんなのところに戻ったら、スポンサーに怒られたのなんの……。マジで帰ろうかと思った。

飛行機の中では、スポンサーと席が隣合わせだった。実を言うと今回、サンディエゴ行きを決意する寸前まで、僕は、何もかも投げ出したい気分になっていた。「薬物依存症」「回復支援」「12ステップ」「ミーティング」……何もかも、クソ食らえという気分だった。機内で、そんな思いをスポンサーにずっと吐き出し続けた。スポンサーは黙ってずっと聞いてくれた。

サンタモニカで、夕焼けの海岸線を歩いた。なんてパタ臭い街だろうと思っていたが、海はよかった。久しぶりに水平線を見た。オレンジ色に染まった空にカモメが漂っていた。

支援センターの精神科医のI先生と話した。「回復なんて僕はしたくないですよ。努力して頑張るに到達して、しかもそれを維持していかねばならない……それが回復なら、僕はもう、うんざりだ」I先生は僕の顔を見て、静かに微笑んでこう言った。「回復が到達点だと思ったら、苦しいね。なんとなく楽になれたら、それが回復なんだけどね」……ちきしょー、このセンセイも俺のこと、病気ふけえ奴とか思って



んだらうなあ……

ざらざらした感情を胸に押し込みながら、夜のショッピングモールをスポンサーと歩く。大道芸人たちが芸を披露している。スキンヘッドのスポンサーの姿が、街の中に溶け込んで違和感がない。この人も、日本では生きづらさを感じているアディクトなんだなあ……と、見慣れたはずのスポンサーのヤカン頭をしげしげと眺めた。

### 1日 アミティ見学

早起きして、朝の海岸線を散歩した。はるか続く砂浜に、白い波が砕けている。大きな車輪の青いトレーラーがボードを引っ張って砂浜をならしている。タンクトップにホットパンツ姿でジョギングするL.A.娘。頭まで毛布をかぶって寝そべっている年老いた浮浪者。ポップ・アートのような海岸の風景の中に、はじけるような健康と、救いようのない宿痾が点在している……自由の国、アメリカ。

アミティという施設を見学した。刑務所に服役していた連中がミーティングで回復して社会復帰していく。ポブ・サブみたいなゴツイ黒人たちが波乱万丈の体験談をしてくれた。「ここに来るまで、生きるということがどういうことか分からなかった……」両親が殺人で服役していて、銃で16回撃たれたという元ギャングのゲーリー。満面の笑顔だ。刑務所に4年ほど服役し相当に苦しい思いをしてきたつもり僕なんかヒョッコもいいところだ。アミティのプログラムは仲間同士の感情に徹底して踏み込み、孤独や狂気からの解放を目指す。「僕は仲間といてもどうしても楽になれない。一人になりたいくなる……」昼飯のメキシコ料理を食べながらスタッフのマークにこぼした。首ほどあるような太腕で僕を抱いてマークが笑った。「うちに来いよ。一人になんかささせないぜ」。

ハリウッドのR&Bクラブに踊りに行こうと言っていたのに、夜になったらスポンサーが疲れでダウン。タクシーを拾って一人でハリウッドへ。ストーンズやジョニー・ウィンターがプレイしたという「ウィスキー・ア・ゴー・ゴー」に入る。嬌声と騒音。酒と体臭。マリファナの香り。ガキばかりだ。ノン・アルコールでは耐えられない。具合が悪くなって退出した。



アミティのミーティング風景と施設の外観

もう俺、遊べないんだな…。さびしさが、背中に貼りつく。

帰りのタクシーは、気のいい運ちゃんだった。メーターを倒さずに、に、ピバリーヒルズの大邸宅街をドライブしてくれた。要塞のような家、プール付きの庭、ロールスロイス。運ちゃんと、幸福について話した。

「金は、すこし足りないくらいが丁度いいよ」。酒好きだという運ちゃんが、そう言った。仲間だと思った。

## 2日 ハイウェイで事故

早朝。運転疲れてダウンしているスポンサーの腰を揉まされる。トドドカクジラをマッサージしているようだ。ああ、悲しきスポンサーシップ……

ターザンナ・トリートメント・センターを見学。パーソナル・ディスオーダーなどの重複障害を持つクライアントをどう処遇するか。カリフォルニア最大の医療モデルの施設に学ぶ、ということらしい。

しかし、金の掛かった立派な建物に入るなり具合が悪くなる。待合室に並ぶ「患者」たちの怯えきった表情。虚構の匂いを感じる。昨日出会ったアミティの仲間たちの笑顔となぜ、こうも違う？ 専門家たちがアディクトを怯えさせる、その構図は、日本もアメリカも変わらないのか。先生方、なぜ仲間たちを「患者」と呼ぶんですか？ そうだ、アミティでは「学生」と呼んでいたじゃないか。

昼飯は豪華なサンドイッチ、パスタ、フルーツ、ケーキに紅茶、コーヒーにジュース。バイキング風の上品なランチ。ジェントルな「おもてなし」。そこで過食して、トイレで吐いていたのは僕です。ごめんなさい……ナニやってんだか。

サンディエゴへ向かう途中、ハイウェイで玉突き事故を起こした。突突然、前の車が追突して止まり、僕たちが分乗していた2台のレンタカーがそこへ突っ込んだ。幸いけが人はなし。ハイウェイ・パトロールの警官たちが次々に駆けつけてくる。映画「マイアミ・ヴァイス」のなかのワンシーンのようだった。

レンタカーを運転していた東京Dのスタッフ二人、テンパるのなんのって……。スポンサーのやかん頭からはシューシュー湯気が出ていた。しかし、ふと気づくと、僕らのツアーのメンバーには医師2人、看護婦1人、心理カウンセラー1人、弁護士1人。支援センターの方々の肩書きの豪華さたるや……。しかも心理のTさんはボストンでMAを取ったバイリンガル。流暢な英語で事後処理をこなしてくれた(Tさん、ホントご苦労様！)。

「ロスのハイウェイで事故なんて、なかなかできるもんやないなあ」

「俺、このメンツじゃなかったら車置いて、走って逃げてたよ」

「俺もや、俺もや…」

と、運転していたDのスタッフたち。この発想、さすがヤク中である。

予定していたサンセット・クルーズには間に合わず。ショッピング・センターを一人で歩く。このGジャン、あいつに似合うだろうか……。

## 3日 コンベンション初日

コンベンション・センターはファンキーな外人ですで一杯だ。ウイंक、目配せ、身振り手振り、足ふり腰ふり、ハグの嵐。温かい笑顔、嬉しそうな笑顔、幸福そうな笑顔。黒人の太ったおばさんにハグされて窒息しそうになる。

「やっぱりアメリカって、ノリのいい外人ばかりですねえ……」

「お前な、アメリカきたら俺らが外人なんやでえ」

「ああ、そうか……」

レセプションに申し込み、マーチャンダイズで買い物。狙っていた格好いいタンクトップはあつという間に売り切れてしまった。

時差ぼけが出て、どうも頭がだるい。

スポンサーと二人、夕刻のヨット・ハーバーで開かれた屋外ライブに行く。

ひげ面の太ったボーボーカルがめちゃ渋いブルース・バンド。踊り狂う女性のサキソフォン。黒人のブルース・ママが唸るように「サマータイム」を唄う。名古屋の女性メンバー2人と合流。スポンサーと4人で、弾けたように踊る。スポンサーのリズム感がけっこう良くて驚く。さすが、この人、ただのタコじゃない……

夜は、コンベンション・ホールでメイン・ミーティング。何万人というアディクトが集まったホールの熱気はものすごい。NAに救われ、NAの普及に人生を賭けてきたオールド・タイマーたちの涙混じりの語り、張り詰めていた緊張が少しずつほぐれていく。

「命のリレー」。僕を助けてくれた日本のオールド・タイマー、ブルートが教えてくれた言葉の意味をかみしめる。

## 4日 わたしは泣きます！

ライブ付きの朝食。「どんなアーティストがくるのかな」と、寝ぼけ眼でぼんやり見ていたら、なんとなくみすばらしい風体の、ひげもじゃの黒人シンガーがステージに現れて、アコースティック・ギターをかき鳴らし始めた。

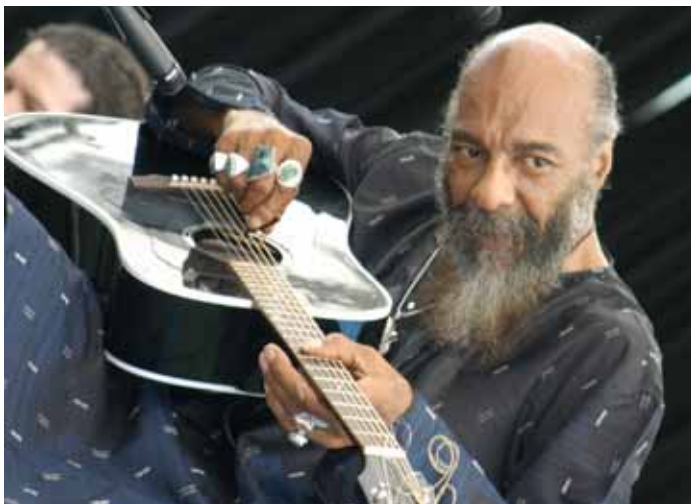
へえ。リッチー・ヘヴンズみたいなギターだな。そう思って目を凝らして、腰を抜かした。

リ……、リ……、リッチー・ヘヴンズ、本人じゃないか！

あのリッチー・ヘヴンズが、ウッド・ストックで何十万人というヒッピーたちを熱狂させたリッチー・ヘヴンズが、僕の目の前で「フリーダム」を歌っている！ な、な、涙が！ 涙が止まらない！

わけがわからなくなりそうな興奮を抑えつつ、会場を出ると、世界中からぞくぞくとメンバーたちが集まり、こぼれんばかりの笑顔でお互いの回復を祝福しあっている。新しい生き方……そんな言葉がふと、頭に響いてくる。

夜のメイン・ミーティングでは、NAの普及に貢献した各国のメンバーたちが集まってオープン・スピーカーズ・ミーティングが開かれた。日本からの出席は、われらがブルート……「ひげのおじさん」である。



飛び入りで登場した伝説のミュージシャン、リッチー・ヘヴンズ



R & Bの王様B・B・キングのギター・セッション

冒頭に指名されたブルートが何を話すか、会場のメンバーが固唾をのんだ瞬間、「わたしは、泣きます！」叫ぶようにブルートはそう言って、大粒の涙をこぼして本当に泣き出した。

その途端、世界中のメン

バー達は1人立ち、2人立ち……、しまいには総立ちになって、会場は割れんばかりの拍手と喝采に包まれた。日本人メンバーたちも、みんな、涙でぐじゃぐじゃの顔をしている。

## 5日 英語ミーティングに挑戦

……といっても、4日の続きだが。深夜（早朝？）、ハイアット・ホテルの一室で開かれているフルタイムのマラソン・ミーティング（コンベンションの期間中、24時間休みなく続けられているミーティング）に、先行く仲間のヒロさんが連れていってくれた。

午前2時過ぎ、ミーティング・ルームには200人くらいのメンバーが集まっていた。下手くそな英語だが、なんとか僕もシェアしたい。話し出すタイミングを計る。しかし、話せない。……は、はい！ 誰かが話し終わると同時に、もう次の人が話し出す。とてもじゃないが入っていけない。「次こそ話そう」「次こそ……冷や汗をかきながらキムむのだが、だめだ。気付くと一時間半も経っている。生まれて初めてミーティングに出たときの緊張感……いや、それ以上だ！

「日本から来たアディクトなんだが……英語が下手くそだし、勇気がなくて、シェアできない。2時間頑張ったが、ダメだ。残念だけど、帰るよ……」

隣の席に、優しい白髪のお爺さんが座っていたので、そうこぼした。本当に帰るつもりだったのだ。すると、そのお爺さんはにっこり笑って立ち上がり、女性の司会者の方に行きながら話し始めた。

「みなさん時間を下さい。日本からの仲間のシェアリングを聞きましょう！」

司会の女性とお爺さんが、こっちを向いて微笑んだ。

刑務所で苦しんだこと。気が狂いそうになったこと。NAに出会っても、NAがなかなか好きになれなかったこと。ミーティングが嫌いで、スポンサーが嫌いで、先行く仲間が嫌いで、回復なんてクソ食らえだと思っていたこと。スポンサーにそれを訴え続けたら「分かった分かった、好きにせえ。せやけどその前に、サンディエゴと一緒に行くことや」そんな風になだめすかされてコンベンションに連れてこられたこと。サンディエゴで世界中の仲間に出会い、海と空と音楽を楽しみ、自分のなかの何か音が立てて崩れつつある……とにかく今は、ハイパーパワーとスポンサーに感謝していること。日本に帰ったらプログラムをやるよ……そんな気持ちになってきていること。

たどたどしい英語で、なんとか話した。全身、汗みずくになっていた。

割れんばかりの拍手とハグ、ハグ、ハグ……。涙だか汗だか、分からない。ヒロさんも心から祝福してくれた。ヒロさん、本当にありがとう！

ホテルで仮眠したあと、アジア・パシフィック・フォーラムのオープン・スピーカーズ・ミーティングに出席。日本の女性の先行く仲間、ハルエのスピーチを聞いた。涙と笑いに満ちたの正直なストーリーに、会場のメンバーたちはまたしても総立ちで拍手を送っていた。客席から大きく手を振ると、ステージの上のハルエがにっこり笑って手を振ってくれた。なんてかわいらしい人だろう。この人の笑顔に、僕たちはどれだけ癒されてきたことだろう。

夜はなんとスタジアムで、B・B・キングのライブ演奏。飛び入り参加したダブル・トラブルのギタリストがジミヘンばりのギターを唸ら

せたあと、マイクに向かって叫ぶ。「俺もアディクトだ！ クリーン6ヶ月だ！」会場は割れんばかりの大歓声。そしてステージには、な・な・なんとDr.Johnまで飛び込んできた。Dr.Johnの首には、僕たちと同じコンベンション参加者のネーム・カードが下がっている。ニュー・オリンズのR&Bシーンで大暴れしてきた風雲児、Dr.JohnもNAで回復してきたのだ……地響きのようなB・B・キングのボーカル、Dr.Johnの狂ったオルガン、ダブル・トラブルの切り裂くようなギター……なんというファンキーな夜！ 気づいたら席を離れて、ステージのまん前で踊り狂っていた。

## 6日 仲間に伝えよう……

「沢山のアディクトがいて、沢山の人生がある。人生のさまざまな局面で、私たちアディクトには、いろいろと失われたこと、傷ついたこと、奪われたことがあった。でも、回復ってというのは頑張って、失われたものを奪い返すことじゃない。歯を食いしばってどこかにたどり着き、それを死守することでもない。人生の課程でNAという祝福されたプログラムにめぐり合い、プログラムによって自然に、失われたものが補われていく。自然に……回復ってというのは、それだけのことなんだ。私たちにあって、まったく自然なことなんだ」

5日のマラソン・ミーティングで、僕をシェアに導いてくれた老人が、自分のシェアのなかでそう語っていたのを思い出した。

ヒロさんの話では、あの老人はソーバー33年、アメリカのNA創設の頃から関わっている古いメンバーで、あの会場にいたメンバーたちから尊敬されていた人だったのだそうだ……たまたま横にいたお爺さんだと思っていたのに。さすが本国のNA。ふところが深い。

帰りのハイウェイは僕が運転した。スポンサーも、支援センターの看護婦Mさん、ワーカーのEさんも、熟睡している。みんな、コンベンションの日々でスパークし切ったという表情だ。アディクトも、健康者もないじゃないか。みんな日本で、今日一日を生きること喜び、哀しみ、いたみを抱え……そしてNAに関わることで癒され、明日を生きていこうとしている。そんなことを考えていた。

コンベンションに来ることができて、本当に良かった。日本に帰ったら、プログラムをやるよ。逃げてばかりいたステップ4に、真剣に取り組もう。ミーティングに行こう。この経験を、今回アメリカに来られなかったグループの仲間たちに伝えよう。そして、僕の帰りを待ってくれている彼女に。2005年のハワイのコンベンションには絶対、彼女と2人で行こう……

隣で、疲れきったスポンサーがいびきをかいている。今回ばかりは、この人に感謝だ。なんだかんだ言って、僕の回復は、この人に支えられてきたんだ……

感謝しなくちゃな。ヤク中になってよかった。こんな素敵な仲間たちに出会い、こんな経験をすることができたんだから。僕もいつか、後からきた仲間の役に立てる日が来るんだろうか。「命のリレー」って、そういうことなんだろうな……

スポンサーが寝返りを打った。日焼けしたスキンヘッドをぼりぼり掻いている。ああ、見苦しい……やっぱり、あんまり持ち上げないほうがよさそうだな、この人。



(取材構成：フェロシップ・ニュース編集部)



### 平和の道具

神さま、

私をあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を、

いさかいのあるところにゆるしを、

分裂のあるところに一致を、

疑惑のあるところに信仰を、

誤りのあるところに真理を、

絶望のあるところに希望を、

闇に光を、

悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。

慰められるよりは慰めることを、

理解されるよりは理解することを、

愛されるよりは愛することを、

わたしが求めますように。

わたしたちは与えるから受け、

ゆるすからゆるされ、

自分を捨てて死に、

永遠のいのちをいただくのですから。



フェローシップ対談

# アディクションの時代を語る（前半）

齋藤学さん（家族機能研究所代表） & 近藤恒夫さん（APARI副理事長）

**富永** 齋藤先生、アパリの会報のフェローシップ対談にご協力ほんとうに有難うございます。前回、上岡ハルエさんとお話しいただいて、非常に面白い盛り上がり.....すごい好評を頂きました。とりあえず、この対談企画は今回が最終回ということで、近藤と齋藤先生にお話しいただいて、それでシメようと思っています。

**齋藤** はいはい

**富永** どうぞよろしくお願い致します。ハア.....緊張するなあ

**近藤** へへ.....

**齋藤** 近藤さんとはこの前の.....国会で会ったきりじゃない？

**近藤** ひどい国会でしたな。.....人種差別発言の。

**齋藤** 人間じゃないってね（笑）

**近藤** えっへっへっへ.....やっぱり向こうは、人間だと思っていわな（笑）

**齋藤** .....同じ人たちとは言えない、とか（笑）

**近藤** やってる奴らと一緒にやるわけにゃあいかないっつうんだろ？

**富永** 国会で、青少年特別委員会に、先生らお二人が呼ばれたんだ。

**ちえぞう** はい。（今回は女性スタッフのちえぞうが飛び入り参加しました）

**近藤** 金出せて言っても出さないね、あいつら。金出せ金出せて一生懸命言ってるのにさ（笑）

**齋藤** うん.....ムリだろうね

**富永** 「ダメ。ゼッタイ。」運動（注1）の理事長も呼ばれて、なんで提携しないんだってという質問が議員さんから出たときに、「ダルクの人たちとは住む世界が違うと思ってますから」って、言ったんだ

**ちえぞう** あっちの人が？（笑）

**近藤** あのおじさんも.....世の中知らないよなあ

**齋藤** 住む世界が、というか、「人種が違う」って言ったんだ（笑）

**近藤** なかなか、国会でああいうことを言える人ってのは、少ないよね（笑）

**ちえぞう** あはははは！

**齋藤** ボケがましてるのかなと思ったんだけど、最初ね。ボケじゃなかったんだね。隣り見たら。おでこに汗かいてた。なんだね、ありゃあ（笑）

**ちえぞう** ククク.....

**近藤** ああいうのは、警察の天下りですかね。どこの天下りかな。

**齋藤** あそこからも行ってますよ、厚生労働省からも。

**近藤** 厚生労働省。ああ.....

**齋藤** 私、久里浜（注2）にいたとき、手伝われたことあるから。

## シンナーは川に捨てていた？！

**富永** 齋藤先生と、近藤さんて、お年が同じなんですってね

**齋藤** 同年じゃないかな。私、41年の2月だから。

**近藤** 先生のほうが兄貴だよ。僕は41年の8月だから。

**富永** 近藤さんが初めてダルクを作った、18年前に.....当時、齋藤先生は久里浜にいらしたんですか？

**齋藤** あの頃どうしてたかなあ.....もう、久里浜は出てたと思うな。出てたっ、て.....出所みたいだけさあ。その頃、近藤さんが何だか、日暮里だったっけ？ なんだかヘンな倉庫みたいところ（注3）にいたよなあ。

**近藤** そう、そう（笑）



**齋藤** 何だか.....ウワサによればだけどさあ、なんか.....ミーさん（注4）だけ、ミーさんのあとだ。あの人のこの.....マックだ。マックの金を持ち逃げしたとかいう噂が聞こえてきた。

**一同**（爆笑）

**近藤**（笑って）いや、そうじゃないんだ。最初、ミーさんが大腸ガンになって、急にコネカットに帰んなきゃいけないという状態になったときに、ミーさんから少しお金、借りようかなと思って。

**齋藤** なんだ、ミーさんにお金、借りさせようとしたのかと思ったよ（笑）

**近藤** ちがう、ちがう（笑）、アルコール依存症の施設でアル中が回復するんだったらヤク中の施設があったら、ヤク中だって回復できるはずだと、俺は考えたわけ。

**富永** うん.....

**近藤** 「そうでしょ？」ってきいたら、「ヤク中の回復なんて信じられないよ」ってミーさんは言ったよ。「ワタシハ、シンジラマセン」って（笑）。「じゃ、どうすればいいんですか」って言ったら、「どうしても聞きたかったら、齋藤学という若手の医者がいるから、それがいいんじゃないかな」って。唯一、日本の精神科医でミーさんが名前を出してくれたのは、齋藤先生の名前だったんだよ

**ちえぞう** ふうん.....

**近藤** 今にして思うと、あの人はめったに.....自分のことは言うけど、ひとのことは言わない人なんだ。「齋藤先生に聞いたら？」って、そのひと言が効いた。その直後に先生に呼ばれたんだよ。その頃、先生は都精研と松沢病院と、両方やってた。都精研で覚せい剤についての会議があって、小沼先生（注5）なんかと一緒に、僕も出席したことがあった。

**齋藤** あのころは、私.....83年ごろですよ。都精研にいて.....松沢病院って広いじゃない。あん中に都立の、アルコール薬物センターってのを作ろうとしていてさあ。あたしなりにやってたんだわ。まだ.....アパリなんてのは、なかったしね。だけど.....結局、88年かな、アルコール病棟という形で、たくさん病棟のうちのひとつになっちゃったんですよ。そしたらもう、しょうがないじゃん、あそこにも、で、外来やめて、研究所だけになった。そんな話をしていた頃、近藤さんと会ったんじゃないかしら。とにかく、あたしが聞いたのはね、要するに.....勝手に金を持ち出して、借りたとか買ったとか（笑）

**近藤** えっへっへっへ.....いや、買う金はなかったんだけど。ロイさんは当時.....

**齋藤** ああ、ロイさんだ！ ロイさんも、悪いことに使っているわけじゃないから、しょうがないから黙認したとかって.....それを、風の噂で聞いてたんだよ。へえ、すげえ度胸すわってるじゃない、なんて言ってさ。

近藤 えっへっへっへ……

斎藤 わっはっはっは！

近藤 ダルクが2年くらいしてからかな。先生がAKK（注6）、「アルコール問題を考える会」ってのを作ったんだ。

斎藤 あの前後は……月に1、2回、ダルクに顔を出していたよ、私は。で、新しく入ってきた人のインタビューなんかもやっていたり。……犬がいたよね。犬といっしょにミーティングやってたじゃない、あの当時。

近藤 そうそう。はっはっは……犬がいちばんよく聞いてたよ。

斎藤 あそこにあたしも、一緒に座って聞いてたり、していたことがあるよ。

ちえぞう なんか、かわいいなあ（笑）

斎藤 ところが、シンナー使ってる奴がそこに入りこんじゃうとさ。大変なんだ。一人汚染すると、みんな、周りもやっちゃってね、

富永 なるほど……

斎藤 ほら、近藤さんとしてはさ、どうしようもないのは、松沢に捨てたい（松沢病院に入院させたい）わけよ（笑）

富永・ちえぞう（爆笑、近藤は苦笑）

斎藤 けどね、病棟担当医やってりゃ、どんどん入れられたかもしれないけれど、私は研究所のほうにいたから。だもんで、「そんなになっちゃたのは入れられないんじゃない？」なんて言うとき、「しょうがないから捨ててきましょうや」なんて言ってさ（笑）

近藤 えっへっへ……

斎藤 どこに捨てていたんだかわかんないけどさ（笑）

富永・ちえぞう（爆笑）

近藤（苦笑しつつ）荒川をこえてね、荒川の、向こうに捨てたんですよ、だいたい。

斎藤 わっはっは……

富永 マジで捨ててたんですか？！

近藤 そうだよ。車に乗って行って（笑）

斎藤 ブロン（咳止め薬）やってる坊ちゃんがいるさ。これはね、結構治るんだよ。半々くらい。

富永 はあ……

斎藤 シンナーは、ダメだ。若いうちからシンナーだと回復はすごく難しい。

近藤 いったん施設を出てもらって、底をついてもらうしかないんだ……あるときねえ、犬が迷い込んできて、で、シンナーの子はね、かわいがるんだよねえ、また。「かわいそうだ」とか言って飼いだしちゃって。犬がふえちゃって。それでもう、犬をどこかに捨ててこようって言って、3匹の中から2匹捨てるのは不公平だと。「近藤さん、3匹どうして捨てないんだ、えこひいきじゃないか」なんて、それで喰ってかかられたこともあったな。大変だった、あのときは。ナイフ突きつけられたり。

斎藤 はっはっは……いなくなったねえ、急にねえ。犬が。ドラマがあったんですよ、そこには。

近藤 猫は居つかないんですよ。猫ってやっぱり、女性だけのところには居つくんだよね。

ちえぞう へえ～。

斎藤 危険を察知する能力、高いんじゃないの？

ちえぞう あっははは！

近藤 ホルモンの関係じゃないですか、先生（笑）

富永・ちえぞう（爆笑）

近藤 俺のところには、猫、絶対に寄ってこないけど、発情したら、女のほうにばかり行くんですよ。猫ってのは女性の匂いが好きなのかね。うちの女房（編注・上岡ハルエさん）なんか、しょっちゅう犯されてますよ（笑）。キクマルっていう猫がいるんだけど「私には亭主がいるからやめてくれ！」なんて（笑）

一同（爆笑）

## 言葉が与えてくれたもの

富永 今日は、なぜ僕たち若いのが二人、来たかっていいますと……ちえぞうさんは以前から、さいとうクリニック（注7）の患者さんでもあるわけです。彼女はクスリは処方薬だけだったみたいですが、アディクション、依存症という意味では当事者としての認識をお持ちです。当事者であるところの僕らからみるとお二人はその……なんていうのかな、この業界の巨人といえますか、ホント雲の上の人なんです。それで今日はそのお二人に、このあいだの対談でも先生がおっしゃっていた「アディクショナル・ビヘビア（嗜癖行動）の時代」（注8）……僕たちの時代というのは、先生方の目から見てどのように映っているのか、それを聞いてみたかったんです。

斎藤 うん……なんだろうと思ってたんだよねえ。自己愛的な時代とか言っていたのは、20世紀の後半くらい、「ナルシズムの時代」とかいう本が出たりして。本格的に、ナルシストになってきたね、みんな（笑）。

富永・ちえぞう はあ……

斎藤 自分の世界の中で王様をやる、というかさ。はたから見たら、淋しそうに一人でいるんだけど、自分の中で充実している。そうしようと思つたら、クスリはいいよね。

富永 ふむ……

斎藤 淋しくないしね、やっているうちはね。まあ、昔からあの……ボードレール（注9）あたりからさ、クスリっていうのはアーティストにとつて必須のものだったけれど。今はみんながアーティストでさ（笑）

富永・ちえぞう（苦笑）

斎藤 昔の時代はさ、ブルジョワジーというか、貴族の子しかやれなかったようなことを、今は一般庶民がみんなやっているから。

富永・ちえぞう はあ……

斎藤 昔の庶民なんてあなた、顔の後ろだけ前だかわかんないくらい真っ黒になって、男も女もないくらいでしょ？ 女だって朝から晩まで働いていた。「専業主婦論」なんてのが出てきたのも、ここ5～6年のことですよ。昔は奥方しか、専業主婦なんてのはいないもんね。

ちえぞう そうですね……

斎藤 そのくらい豊かになっていってさ、その子どもたちの問題でしょ。子どもたちも自意識過剰でさ。自分の個性だか何だかわかんないけど、そういうようなことを言っているから。要するに、ほとんどの人はナルシズムっていても、どっちかというアートだよな。

ちえぞう うーん……

斎藤 アート……だったら、何やってもいいんだもん。

富永 ぶっ……はははは！（思い当たる）

斎藤 何やったらって芸術だもん。空想から何からさ。そしたら、ポール・マッカートニーとマリファナじゃないけどさ。必ずそれはドラッグに結びつくんだ。

富永 ダルクやNAもアーティスト系の人、多いですよな。

斎藤 あなただって、あれだろ？

富永 はい？

斎藤 文を書くって聞いたけれど。結局、記者やライターだって、あれもさ、どっかでそういう……あやしい奴しか、そういうことは、やらないよ。

富永・ちえぞう あっはははは！

近藤 えっへっへっへ……

斎藤 自分の頭の中から、文章つむいで、それで食っていこうっていうんだから。

富永 その通りです（笑）

ちえぞう ふふふ……

斎藤 実業を、嫌うね。

富永 ああ……

斎藤 朝4時に起きて、豆腐を作るとかさ、パンをこねるとかさ（笑）

ちえぞう ムリ、ムリ！（笑）

斎藤 好きならできるのかなあ。……どっちかっていうと、時代はそっち



カット: haruna

へ行っていないような気がする。

**富永** 「自己愛的な時代」というのは、確かに、ご指摘のとおりだと思います。その僕たちに、「トラウマ」という言葉が急速に浸透していきました。僕らにとって、「トラウマ」という言葉は、非常に居心地のいい言葉なんですよ。

**斎藤** うん。

**富永** 僕たちの世代というのは、戦争を知らなかったり、直面せざるをえなかった厳しい時代というのを知らず、「甘やかされた世代」なのか。それとも、家族という枠組みで考えたときに、一種、搾取された立場にいる「ひどく虐げられた世代」……強迫的なものを必然的に持たざるを得なかった世代、と考えるべきなのでしょうか。

**斎藤** うん……まあ、昔はさ。トラウマだの外傷体験なんて言っちゃってさ。5人生まれて3人育てばよく育った、みんな6月になったら梅の実を食べて死んでいく、みたいなね。そんな時代だったでしょう。七五三なんてのは「3歳まで生きたよ」とかさ、5つまで、7つまで生きたよ、とか、祝ってたわけでしょう。昔は、ただ生き残っただけで感激でさ。42.195キロ走り抜いたマラソン選手みたいなもんよ。そしたら「生かしてくれた親の恩は……」と、こういうわけですよ。

**ちえぞう** はい。

**斎藤** いま、男が増えてしょうがないじゃない？ 新生児の男女比ってのは108対100でさ。成長するまでに男が8人死んで、ちょうど1対1になってただけ。それがみんな生き残っちゃうから、男が増えちゃってさ。今はそういう時代よ。

**ちえぞう** うん、うん

**斎藤** そうするとね、こまごまとしたさ、親がこうだった、ああだったみたいだね。「私は友達に比べて不幸だった」とか、「姉に比べて私は」とかさ。そういう話がね、物語として成立するようになってしまったんだ。

**ちえぞう** ははあ……。

**富永** 斎藤先生はある意味、僕たちにとって、「言葉を与えてくださった方」なんですよ。

**斎藤** うん

**富永** たとえば刑務所にいたときの僕は、先生の本を読んで、どうしてもクスリが止まらなかった苦しみというのを、先生の言葉がすごく代弁してくれた、という気持ちがあったんです。斎藤先生が与えてくださった言葉によって、生きづらい自分の居場所をどうにか見出してきた人たちって、他にもたくさんいると思うんですよ。でも先日、ある方とお話していて伺ったんですが、「言葉を与える」ということは「状況を定義する権力を行使する」ことだ、と。だとすれば、それによって救われる部分と、逆にそれが手かせ足かせになってしまう……

**斎藤** なるほど

**富永** 逆にそこから出てこれなくなってしまう……そういう部分がある、と。ある意味、「アディクション」にせよ「トラウマ」にせよ、「機能不全」という言葉にせよ、救われる部分と、からめ取られて動けなくなる部分があると思うんです。

**斎藤** 言葉っていうのは、危険なものです。危険なもので、言葉が与え

ている状況と、言葉からはみ出している現実っていうのは、いつだって対立してくるんだね。だから、自分が自分の物語をつくる時は、既存の言葉で定義できない部分を、注意深くしゃべっていかないとね。

**富永** そうですね。

**斎藤** でも、「機能不全家族」という言葉をひとつ、考えてみるとさ。「機能」と「家族」、それに「不全」という言葉を結びつけるとね。家族ってのはファンクション（機能）するものであってさ、してないところもあるよな、っていう考えが生まれてくるわけだ。じゃあファンクションって何だっけと思ったら、結局……近藤さんとこはどうだったっけ。子ども、何人かいるんだよね

**近藤** うん。

**斎藤** 子どもがいなきゃね、夫婦なんてやっちゃってしょうがないんだよ。子どもが15年、子どもをやるから、親も、ふた親一緒のほうが都合がいいよね。子どもに関しての宇宙でしょう、家っていうのは。

**富永** はい。

**斎藤** 宇宙は壊れないでいたほうがいいから、婚姻っていう法制度も大事にされるようになるわけでしょう？ そうでなければ婚姻制度なんていらぬしね。「子どもを産んで、それを育てる」というのが、ひとつの機能ですよ。この「子産み」のところで機能不全を起こしている人は、不妊治療なんかやって、ずいぶん苦労していますよね。子産み、子育ての段階で、今のお母さんはやたら罪悪感を持っているんだけど。いいんだよ、育てればね。まあ、なんとか生かしておけばいいんだ。

**富永** はい。

**斎藤** そして、もうひとつあるんだよ、本当は。「子どもを、(家から)出す」ということ。これがどうも、うまくいってないんだ……子別れが、うまくないでしょ。子別れってのは、ちょうど思春期なんだが、ここでいたいおかしくなってる。思春期問題ってかたちで、薬物乱用も含めて、日本の家族の大きな問題になっている

**富永** はい。

**斎藤** 機能不全といっても、みんながみんなアル中、ヤク中のたぐいの目に見えるものじゃない。お父さんが職場に行っただけだから、お母さんが過保護になっちゃう「過保護家族」ってのもあるしね。それから、はたから見れば理想的な家族に見えるんだけど、なんか父さんが偉すぎちゃって、冷たくてさ。子どもは寄りつけない、みたいな。そういう……目に見えない機能不全も、あるんですよ。「家族」「機能」という言葉が、こういう微妙な形の家族の問題っていうのをね、腑分けして、そこで起きる子どもの心の傷みたいなものを見られるようになった。

**富永** そうですね。今まで見えなかった部分に焦点が当てられるようになりました。

**斎藤** 以前はそれどころじゃなかった。精神病だったって、よっぽどヘンな人じゃないと、関心の対象にならなかったけど。それに比べると今、アダルトチルドレンとか何とか言っている人たちなんてさ、すごく繊細な問題を取り扱っているよね。結果として起こしている問題は大きかったとしてもね……今度、出所してくるね。あの、神戸の連続殺人事件の。

**近藤** ああ……はいはい。

**斎藤** 少年A、と呼ばれていた青年が。さっそく、聞かれるんだよ。「どうしましょうか」とかさ。「どうしましょう」ってあたしに言われたって(笑)

**一同** (笑)

**斎藤** 「遺族はどう思うと思いますか」とかさ。「わかんないよ、そんなの」って(笑)

## これだよ、人生！

**近藤** 私らの生まれた1941年くらいは……あの時代ってのは、ヒロポンがすごい大変な時代で。朝日新聞なんかで、「眠気、倦怠にヒロポン錠」とかね。

**斎藤** そうそう、大日本製薬っていったね。「マルP」って書いてあった(笑)

**近藤** そういう宣伝がまかり通ってましたよね。

**斎藤** あったよ、新聞に、でっかく。あたしらは、赤ちゃんだったけど。終戦後……



近藤 堂々と、薬局で売ってたよ。

齋藤 1950年くらいまで、あったんじゃないかな。

近藤 あのころのヒロポンというのは、あの.....意外と高学歴の人たちが使っていたよね。

齋藤 サトウハチローとかさ、文筆家ですよ。売れっ子の。

近藤 ヒロポン中毒から回復した人たちがね.....けっこう、学校の先生をやっているんだよね。仕事ないから、先生でもやるか、って感じてね。あの当時は、そういう先生がすごく多かった。

齋藤 「でもしが教師」って言ったよね。

近藤 結局、子どもが多いじゃないですか。8人とかは普通だから。その中で、勉強する奴、大学とか行く奴はひとりでもいいんだ。で.....それがやっぱりこう、昼夜逆転しなきゃ、勉強できないわけ。だから、睡眠薬とヒロポン使って、両方で時間コントロールしながら、勉強したんだ。そういう高学歴の人がけっこう多かったですよ。

齋藤 流行作家の次はだから.....東大に入るような、受験生だよ。

近藤 受験生だったよね。

齋藤 あれのおかげでね、帝国大学に入ってるのがいるんだよ

近藤 えっへっへ.....

齋藤 うまく使う人は何やったって、要領よくやるんだよ。(司会に向かって)あなたみたいに.....(笑)

一同 (爆笑、富永は苦笑)

齋藤 不器用な使い方の人だけじゃないんだ(笑)

近藤 警察の官舎に飛び込むような奴ばかりじゃないんだ(笑)

富永 うるさいなあ、もう.....(笑)

齋藤 「もう、いらないよ」とか言いながら、使ってる奴は使ってるんじゃないの。「一発キメなきゃいけないときは、やっぱり必要だよ」とか言いながらさ、

富永 いるですよええ.....

齋藤 それで社会的にファンクションしててさ。「まさか、あの人が」.....とかさ。

富永 なんであんなふうにな器用にしか使えなくなっちゃったのかな.....。最初は器用に使えてたんですよ。なんであんなふうになってしまったのか。それを考えたときに、やっぱり、子どもの頃の被虐待体験が浮かび上がってくるんです。

齋藤 うん.....やっぱり、そうじゃないですかね。

富永 はあ.....

齋藤 器用に使える人っていうのは、世の中のことを信用しているわけでしょう？信用しているから、まさか俺のことは捕まえるわけがないだろう、と思っているから。堂々とやってるから、捕まんないんだよ(笑)

富永 そうだったのか.....

齋藤 コカインなんかもさ、フロイトが最初に使いだして、周囲みんなコカイン依存になっちゃったり、中毒に.....コカイン精神病をおこしたしね。ひどいことになったんだけど、フロイト自身は全然、無傷よ。スキャンダルになってウィーン大学にいられなくなったんだけど、それでコカインはやめたけど、葉巻はずっと、上顎(じょうがく)ガンになって死ぬまでやってたでしょう。強い奴は強いんだね、フロイトなんて83までやってたんだから。弱いのはね、すぐに捕まったり、精神症状が出ちゃったりさ.....何なんだろうね、あの強さ・弱さってのは。

富永 はい.....

齋藤 やっぱりね、素質とかなんとかって言うよりも.....小さいときにね、「おまえは丈夫だ」とか「かわいい」とか.....なんちゅうかな、信念を植え込まれているかどうかだと思うな。「おまえはダメだよ」って言われて育っちゃった奴はさ、免疫機能が落ちちゃうんだ。がんばんなきゃ私は生きる価値がなかったって人は.....それがシャブなんて見つけちゃったら、がんばりの道具にしちゃうでしょ。

富永 そうですね.....まさに僕は、それで潰れました。刑務所に服役して、出所してから近藤さんにお会いして、自助グループやダルクのミーティングを教えてもらいました。前回の先生のお話じゃありませんが、そこで言葉を与えられて、自分を語るように少しずつなって、そうして今に至るわけです。このコースって、自分にとっては.....自分の人生に与えられたものだったんだって本当に思えるようになってきました。

齋藤 うん.....そうみたいですね、あなたのお話を聞いていると。それ以外ありえなかったな、みたいな思っているのはさ、回復のひとつの基準なんじゃないかな。「なにを間違えてこんなことになっちゃったのかな?」って言っている、トクすることなんかひとつもないもんね。

富永 はい.....でも、いまだにそうも思いますけどね(笑)

ちえぞう あははは.....

齋藤 そういえばね、今週の週刊新潮を読んでいたらさあ、森繁の遺言録、とかいうの、あるじゃない。あれ、いつもは読まないんだけど、なんかのきっかけで今週読んだらね.....三木のり平って役者、いるでしょう?あれが山茶花を後ろに乗せて、人力車の車夫の役で、舞台をずっと走って行って向こう側に森繁がいる。そういうセッティングでね、

ちえぞう はい。

齋藤 それでねえ.....遠くから走ってきたって状況の演技だから、舞台の袖で、エッポ、エッポってやってんだってさ。それ、2週間くらいやっていてね、あと落日まで3日ってときに、うしろに乗っていた山茶花がさ、「変な商売だな」って言ったんだって。

一同 (笑)

齋藤 それからね、全然ダメになっちゃって、トチるわなんだわでね.....それ以来、三木のり平が芝居できなくなっちゃったっていうんだよ、晩年まで(笑)

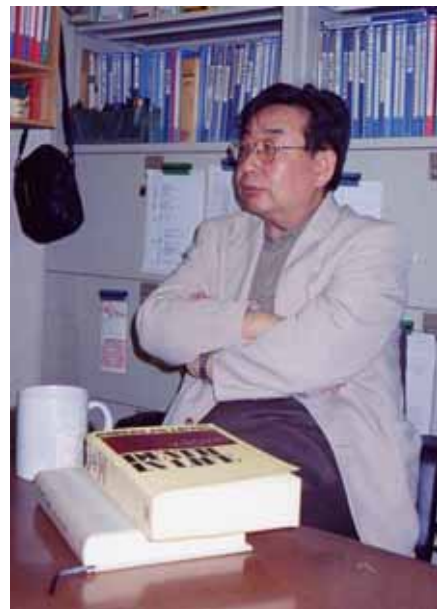
ちえぞう ふうん.....

齋藤 そういえばあの人、急に消えちゃったよね。役者やって「変な商売」だと言われちゃったらさ(笑)、やってらんないよ

一同 (笑)

齋藤 これだよ、人生! 「あたしの人生、ヘンだ」とかね、「むなし」とかね、「なんでこんなことやってるんだろう」とか思い出したらもう、何もできないよ。回復しているのはさ、「私はシャブやって、こうやってああって.....それがある」という物語をきちんと成立させたときに、なし得るんじゃないの?

富永・ちえぞう うーん.....



齋藤 学(さいとう・さとる)さん。1941年、東京生まれ。精神科医、医学博士。慶應義塾大学医学部卒。国立療養所久里浜病院精神科医長、東京都精神医学総合研究所主任などを経て現在、家族機能研究所代表、さいとうクリニック院長、アライアント国際大学・臨床心理大学院教授。著書に「家族の間を探る」(小学館)「家族依存症」(誠信書房)ほか多数。



カット:haruna

## 男のダルク、女のさいクリ

**近藤** うーん……回復。なんだろうな。俺は1年くらい、わかんなかったよな。なんでミーティング出たのか。

**斎藤** ふいふ……「なんでこんなところにいるんだろう」って？

**近藤** そう。

**斎藤** 「ヘンな集まりだな」って？

**近藤** こういうね……生活保護もらってね、腹水がたまって……ガンになってあと余命いくばくもないおじさんたちと、なんでこんなことしなきゃいけないのかっていうのが、すごく不思議だったよね。で……治ると思ったんだよ。「治る」というか、いろんな幻聴とかそういうものが全部とれて、薬物使用の欲求もなくなっていくだろう、とね。アル中の人たちが、3ヶ月、ミーティングやったら、飲みたいと思わなくなったっていう人が、けっこういたんだよ。

**富永** ふうん……

**近藤** で、本当かよ？ って感じで。俺は毎日やりたくてやりたくてね。ヒマさえあればやりたいって、そういう感覚だったから。これが「治る」っていうのは、そういうのが全部とれることだと、さらっとなくなるのが回復だと思っていたんだ。だけど、いつまでたっても……3年間くらいは、やりたくて仕方なかった。それは、新しく始めた俺のプログラム（注10）がおかしかったからかもしれない。アルコールの回復者たちが正しかったのかも知れない。でも、彼らの考えには、共感できない部分もあったから。ま、仕方ねえや、俺の回復なんてこんなもんだな、って思えるようになってきたのは、ミーティングに毎日出て、1年くらいしてからだよ。ある日、「ああ、治らなくていいや」って思った。「これをこのまま持ちつづけていけば、俺は安全だな」と思ったんだ。「俺は危険だ。いつだって、明日はわからない」「明日、手を出すかもわからない。でも今日は我慢しておこう」って感じになったときに、初めて何かこう……スツと入ってきたんだよ。3ヶ月前に誰かが言った言葉とかがさ。

**ちえぞう** ああ……

**近藤** あんとき、医者がこういうことを言ってたな、とかさ。「あんたは昼寝してるだけで充分だ、クスリさえ使わなきゃいいんだ」と。そりゃそんなときはすごい腹が立ったけれど、

**斎藤** わっはっはっは！

**近藤** 「家族がどんなに助かるか、社会がどんなに助かるかわからない」なんて言われたことがね（笑）。この医者、俺の能力をバツサリ切り落としかがって。ヤブ医者が！ と思いつつ。

**富永** ふうん……

**近藤** で、俺より若いじゃん、精神科医なんて。そんなインターンみたいな奴に、こんなこと言われて……今に見てるって……（笑）

**富永・ちえぞう** あはははは

**近藤** でも、まあそういうことがあって、そういういろいろなことがあったよね、それでまあ、「治らなくていい、このままでいいんだ」って思い

はじめて……そのうちに気づいたら、8年間ぐらいい経っていたわけ。そのときになったらね、また、変わっていたよな。……だから、人は変わっていくんだよ、少しずつ。急にには変わらないけれども。だって、3ヶ月くらい前の話が理解できるようになるのが、クリーン1年（注11）で、ようやくですよ。やっぱり俺は、自分が人の話を受け入れたり、共感する能力がすごく低いんだな、不得手なんだな、と思ったですよ。それから、8年くらいミーティングに、マッチョのように通いつづけて……で、そのうちに施設もやり出したでしょう？ 施設のスタッフは必ずミーティングに行かなきゃいけないというのは、当時の決まりだったんだよ。つまり、自分たちがミーティングに行かないで「お前たち行け」って言ったら、そこで、平等じゃないんだよ、支配なんだよ。

**富永** うん、うん

**近藤** で、そうすると……うるせえ奴らだから、人の揚げ足とるのは（笑）。だから「こいつらに、揚げ足とられてたまるか」ってミーティングに行く。やっぱり仲間は必要だったんだよな（笑）。俺にとってミーティングに行くっていうのは、俺のためじゃなくて、仲間のためとか仕事のためだったりするときもあるんだけど、そこは歯をくいしばって、本当は行きたくないミーティングにも毎日行く。何のために、こんなこと、毎日やってるんだか、わからなくなっちゃうんだ。それでも、仲間はやっぱり見ているんだよな。あとから来た奴は、背中をな。それでミーティングに……8年間くらいは毎日、通いましたよ。施設をやりながらだから……だって、理由にならないんだよな。よそで働いてミーティングやっている人も、いるから。「施設のミーティングやってようがいまいが、自助グループに行くのは当然のことだ」って、言っちゃったから。俺は、行かなきゃいけないかったんだね。

**富永** はい……

**近藤** その頃は週1度くらいしかやっていなかったけれどね、都内でも。それからいっしょに増えたしね。薬物依存症の自助グループは今、全国で128カ所、81グループに増えたですよ。

**富永** この増殖した理由は、何なんですかね。

**近藤** やっぱり、ダルクでしょう。

**富永** 施設、ですか？

**近藤** 最初から、それほど強くはない。日本のヤク中は。

**富永** ふうん……

**近藤** フニヤフニヤだよな、やっぱり。それほど底ついてないし、若いし。楽しいことたくさんあるしね。ミーティングなんか行かなくなると、やるべきことはたくさん、あるから。

**富永** なるほど。

**近藤** でも大切なのはサービス（注12）なんですよ。「自分が助かったんだから、次の人を手助けしていく」っていう、命のリレーの部分だよな。そこが日本の場合は、弱いんだ。宗教的な土台がないというのもあるんだろうね。そこでダルクができて、自立後のアフター・サポートの必要性から、ダルクといっしょに自助グループができていった。……ちょっと変則的なやり方になってしまったよね。でも、そこから外れていけば、さ。いいんじゃないかな。今、ダルクは30ヶ所に「増殖」しました（笑）。まあ、これからも増殖し続けるんだけれどさ。施設作ったら、必ずその地域に、入寮者が通えるミーティング場も作らなきゃいけない、という、そういうことになるから。どうしても、ダルクがあるところには必ずグループが必要になってくるよな。

**斎藤** SARSでさ、スーパースプラッターっていうの？ 1人で何百人にもさ、感染させちゃう奴っているじゃない。

**司会** はい

**斎藤** そういのがいるんだよな（笑）。あたしなんか遠くから見てるんだけどさ、名古屋にしても茨城（注13）にしても（笑）、スーパースプラッターがいたよな。

**一同** （笑）

**斎藤** 一人でパーっと、感染させちゃう

**近藤** SARSだな（笑）

**斎藤** いい奴ともいえないし、誠実だとも、とても思えないんだけどさ、とにかくバラまくんだよ（笑）。ああいうメンバーが貴重だったね。ダルク菌がまん延した（笑）、それにともなってグループも増えてきた。

**ちえぞう** ダルクは……やっぱり、圧倒的に男性のメンバーが多いですよな。で、反対に麻布（さいとうクリニック）は、私たちみたいな女性の患者が多いですよな。

齋藤 うん。皆さん……自分で棲み分けるの。

ちえぞう これは、どういうわけなのでしょう。

齋藤 うん……あたしはさあ、ここ（さいとうクリニック）にアルコール軍団はいつ届くんか？ なんて思っていたわけだよ。ここ始めた頃、95年の頃。あの頃の男女比は2対8で、今でも2対8。それは患者が決めたんだわ。医者っていうのは、患者が決めるからね。で……当時のあたしの関心の対象が女性に向かっていたことは確かで、摂食障害にしても、それから……アルコール依存にしても。なだいなださん達が、男のアル中をずい分やっていたからね。あたしは女性を……アル中の妻とか、女のアル中とか、診だしてたでしょ？ そのほうがね、男のこと考えやすかったんだよね。自分のことってのはよくわかんないものだし。

ちえぞう ふうん…

齋藤 で、ドラッグ依存もね、松沢の頃から比較的、女の子を診ていたんですよ、今でも、どういうわけかね、女性を診てるんだよね……この前うちから松沢に送った（入院させた）のも女性でさ。ここ、外来でしょう？ 2～3週間の間にリラプス（注14）が入っちゃってるよね、無理なんだ、ここでは。「あなたは松沢に入って（入院して）から、こっちにおいで」とか言ってるね。少年院から出てきて1年くらい、もったんだけどね。やっぱりリラプスした。素直だね。「入ってきなさい」とかいうと、「ハイ」って（笑）。

富永 ……それ、ちゃんでは……？

齋藤 そう、そう（笑）

近藤 か。

ちえぞう それ……すぐたいへんだったんですけど……（笑）

富永 その話、僕らにとっちゃシャレになっていない話ですよ（笑）。「齋藤先生のところ追い出された」とか言って、そのあと僕ら仲間内でのケアが大変だったんですから……ちえぞうさんの家にずっと泊まっていたですよ

ちえぞう 行くところないって言って……野宿する、とかいうから……。

齋藤 ああ、そう（笑）。なんかゴチャゴチャ、入院だけはカンベンしてください、とか言っているから、「じゃ、いいよ。入院したくないなら、それだったら、ここへ来ちゃダメ」とかって、それだけよ。

一同 （爆笑）

齋藤 「それだけ」の、残りの部分を、あなたたちがやってたんだ（笑）

近藤 「役割」（注15）だな（笑）

齋藤 ケースワーカーを通して、刻一刻、情報が入ってくるんだけど、「入院した」という情報がくるまで、ずいぶんかかったよね。2～3週間かかったんじゃないか？

近藤 なんだか方々で、パイパイ言ったらしいなあ（笑）

一同 （笑）

## ビッグ・パパたちの「父性」

近藤 齋藤先生はやっぱりさ……父性を持っているんじゃない？

齋藤 あんまりたくさんのは言わないけれどね。……あたし、そんなにね、良医とも名医とも思っていないで。できることの限界があるでしょう。その中でおつきあいできる人とはつき合うんだよ、って。やっぱり、最初にルール決めちゃって。「あたしもがんばるけど、あんたも、つき合いのルールは頑張って守んなきゃ」って。そういうことだからね。それは男の人でも女の人でも同じことだけど。男のほうが……私に言わせるとね、甘ったれだよ。あたし、松沢で仕事してたころは、しょっちゅう怒鳴っていたものね。「先生の外来診察室、うるさいよ」とかって、怒鳴り込まれたこともあるし（笑）

一同 （笑）

齋藤 あの……なんちゅうのかなあ。やっぱり、そうしてくれる人が、いないんだねえ。別に、相手を侮辱したり、子供扱いしたりするのが、いいことだとは思わないよ。でもね……心底、この人は、ここで一発カマさないとダメだと思ふことがあるんだよ。

富永 ふうん…

齋藤 あるヤクザをさあ……福祉事務所から保健婦から、みんなで寄って

たかって一年間断酒させたんだが、これが飲みだすとすぐに、「関の小鉄が泣いている」とか言い出してね（笑）

一同 （笑）

齋藤 福祉事務所でさ、千枚通しっていうのかな。それを、厚い木の板にぶっ刺したりね（笑）。そんなことやって……しかもその刃物をこっちに持ってきたりすると、本当に腹立つんだわ（笑）。それで……こんなトラミたいのをね、怒らせてもしょうがないと思うけれど、「どうでもいいから、ここで、あたしが言う文章を書きなさい」とか。……そういうときには、妙にあたしは、口がいてないになるんだ。口がいてないになったときは、危ない（笑）

一同 （笑）

齋藤 「証明書」とかいったね。書いてもらったんだよ（笑）。「今般、私は不祥事を起こしましたので……生活保護を辞退いたします」、名前を書いて、日付も書け、とかね。「じゃ、これは預かっておくから」なんていって。取り上げちゃったんだ、生活保護を。そしたらさ、あそこに行かれちゃったよ。人権擁護委員会に。「松沢の医者が、身障者を虐待する」って……そいつには、足になんか障害があつてさ。立派な杖をね、福祉事務所で作らせてさあ。彫り物まである頑丈なやつでさ（笑）。それでもってね、引っぱたくんだよ、患者を。とんでもない奴でさ。私一回、見たんだけどね。あの裏門に向かってね、それをこう、振りかざしながら、駆けていくんだよ。追っかけていくんだ。そこを見たんだ、あたししゃ（笑）。「お前、なんだ、ホントかよ?!」とか思うよね（笑）。身障者手帳をねえ、葵の御紋みたいに振りかざしてさあ、「身障者を虐待するのか」とか言って（笑）。そういう奴にはねえ……厳しく言わないとダメなときだってある。

近藤 （笑って）ああ……あるね

齋藤 彼は今、どこかの自助グループでちゃんとやってるらしいや。あたしに生活保護を取り上げられちゃったもんだから、あれだ、ファーストフード店でクッキーかなんか作っていたらしい。

ちえぞう はあ…

齋藤 クッキー焼いたり。それからさ、「厨房をまかしてもらいました!」とかいってさ（笑）。

ちえぞう はあ……なるほど

齋藤 それで……だんだん給料も増えていってね。今では自力でやってますよ。



近藤恒夫（こんどう・つねお）氏。民間の薬物依存リハビリセンター「ダルク(Drug Addiction Rehabilitation Center)」創設者。自らの薬物依存体験を生かしてアディクション問題の啓蒙活動に奔走している。2001年吉川英治文化賞、1995年東京弁護士会人権賞を受賞。

ちえぞう ふうん...

齋藤 「父さん」がね、父さんらしい父さんが、いないんだよ。彼だって、女の股から生まれたっていったって、父さんはいたんだよ。だけど、その父さんの.....彼の妹への性虐待の現場を目撃してね。.....鈍器かなんかで、後頭部をパンってやって。殺しはしなかったんだが、それが最初の彼の事件だ。15～6歳でしょう。

富永 ふうむ...

齋藤 そういう父さんは、「父さん」とはいえないわけだよ。だから、どっかで、あたしを試してね。あの.....ちゃんとした父さんを持つと。いいトシしてんのよ。あたしとそんな、年齢は変わらなかった人だけ。ヤクザとしても、ダメだったね。シャブをさ.....仲介しているときに、売るシャブを使っちゃうんだもん。

一同 (笑)

齋藤 追われてね、こわくて、こわくて.....精神病院に逃げてさ。それから、アルコール依存になっちゃった。ふっふっふ.....そんなの、ヤクザの世界じゃやっていけないよ。

富永 それに対して、近藤さんのキャラクターは「母性的父性」じゃないかって以前、おっしゃっていましたね

近藤 それは齋藤先生が、僕のことを、そういったんだ。

齋藤 そうだね。

近藤 僕は、父親に育てられていないから。母親のもとだけで育ったわけだからね。父親の感覚っていうのがないわけだよ。だから、どうしても.....甘ったれの、用足らずのヤク中の、母親がわりの父親、みたいだね。そんな役回りに、なっちゃうんだな。それが、いいか悪いかは、わかんないけれども。

齋藤 若いヤク中の人たちには、丁度いい按配なんじゃないかね。あんまり厳しい父をやっちゃうとね、自分の父とダブっちゃったりしてさ。

富永 近藤さんのエピソードで伝説になっている話がありますよね。クスリ使ってテンパっちゃって、高い煙突かなんかに登っちゃった人が.....最初尾田さん(アバリ事務局長。法律相談を担当している)のところに電話してきて。「クスリ使っちゃって、高いところにいま、登っちゃったんですけど。まわりの家の人が警察に電話したみたいです。どうしましょう」とかいて。尾田さんが「あなたね、どんなところにたって、どうしようもないでしょう。自分で降りてきて、自首しなさい」といったら、その人、電話切っちゃった。

齋藤 ふうむ

富永 「ああ、切っちゃった! どうしよう?!」「飛び降りちゃうんじゃないか?!」なんて騒いでたら、今度、近藤さんの携帯が鳴った。

近藤 ああ.....あったな。

富永 「近藤さん、どうしよう、もうダメだ.....」ってその人が言うのを聞いて、近藤さんは「そうか。そこは高い所か? 登れー! もっと登れー!!」って。

一同 (爆笑)

近藤 あれは、あの.....2～3年前の話だ。赤羽教会の屋根の、三角形のところを登っていった。どうやって登るのかね、あれ?(笑)

一同 (爆笑)

齋藤 登っているうちは、絶対に降りないからねえ(笑)

富永 でも、そこでそういう言葉が出てくるのが、近藤さんですよ。

一同 (爆笑)

近藤 仕方がないもんなあ(笑)

齋藤 本当、そうだよええ(笑)。たぶん.....何とかできるとか、何かしてあげようっていう気分ときは、ダメだね。そういうセリフは出てこない。「その人は助かる」という無限の信頼みたいのがこっから出てくるときは、割とそういうセリフが出てくるし、効果も持つんだろうね。

富永 実際、薬物を使って、本当にこう.....傷ついた猫みたいに追いつめられている心境のときっていうのは、何を厳しく言われても、身構えてしまっ、威圧に対する反射作用っていうか.....聞けないんですよ。

齋藤 うん。

富永 底抜けの包み方をしてもらえたときに初めて.....自分からも心を開いていける、みたいな感じがあります。

齋藤 そうだね

富永 それがやっぱり、現場で掴んできた近藤さん流なのかな、っていう風に、僕は理解していたんです。

齋藤 一瞬一瞬の言葉とか、ある場面の中だけのフレーズの問題じゃないね。ずっとこう.....遠くからずっと見ていたりなんかして、感じるものがある。そこにひとフレーズがきくとか、きかないとか。そういうことなんだらうね。

## パブリックに向けて語る

富永 もうひとつ、お聞きしたいことがあるんです。前回、齋藤先生にお聞きしたんですが、ミーティング体験というのが.....パブリックに向けて自分のことを話すということが、ひとを信じるということにつながっていく、という。で、それが僕はまだ、よくわからないんです。本当に僕は、グループのメンバーを信じて話しているんだらうか? という.....

齋藤 ふうむ.....

富永 ミーティング経験を積み重ねることによって、こう.....新たな仮面を身につけているだけのような.....気がして。

齋藤 うん。

富永 さっき、「自己愛的な世代」という言葉が、テーマになったんですが、ある意味では「人が信じられない世代」なのかもしれない、なんて思うんですが。

齋藤 うん。「自分」がね.....孤立しているからね。.....だから、余計にね。いいんですよ、信じなかったって。最初は「この人たちはみんな私のことを馬鹿にしながらか聞いてんだ」でもいいし。

富永 はあ...

齋藤 あるいは自分が.....自己弁解のためにしゃべったっていいしね。最初はいいんじゃないですかねえ。だけど、それを繰り返すことが大事なんじゃないの? 繰り返しているうちに、自分が、違う世界でしゃべっていることに、気づくんですよ。

富永 なるほど...

齋藤 やっぱり、人数は多いほうがいいね。政見発表ほどじゃなくてもいいけど。50人よりは、7～800人のほうがいいよ。パブリックに向けて、声を出している感覚、というのはね、「もう、しょうがないや」って感じがしてくるんだよ。

富永 ああ、ダルクのメッセージ活動みたいな感じですかね。

近藤 僕はよく、齋藤先生と一緒に、講演に駆り出されたりしたよ。

齋藤 うん。

近藤 力になるよね。

齋藤 しかし.....この前もね、AKKの市民講座でさ、摂食障害って、食べたり吐いたりすんの、いるじゃん。あれの治った人だけ前でしゃべらせたことがあるんだけどね。そんなの一番年上のがね、「自分のことがすごくよく見えた」って。「あたし、しゃべりたかったんだ」って、しゃべり終わってから気づいた、っていうんだ。

ちえぞう ふうん...

齋藤 すっかり「治った」とはいえ、モヤモヤと、いろんなことがあるわけでしょう? 自分のことをね、わかんないから、イヤだなあって思っていたんだけどね。「あんなにたくさんしゃべりたかったんだって、わかりましたよ」って、そして、「いろんなことがすごく、まとまった」って。.....ヒトってね、語る動物なんですよ。普通はこわいからさ、「この人なら大丈夫だ」っていう人を見つけてからしゃべるんだけど。「正しくしゃべる」ことをすれば、問題は消えていっちゃうんじゃないの?

富永 正しく、しゃべる.....

齋藤 問題は.....ドラッグがその人にとって正しい使い方だったら、別に構わないと思うんだよ。こんなこと、アバリの対談で言っちゃマズいかな.....まあ、あたしは別に、取締官をやっているわけでも何でもなくて、医者をやっているわけだから(笑)。要するに、そういう自分なりの理解ができるようになる、っていうのかな。.....いいじゃん、そんなの。過食だらうがドラッグだらうが、したけりゃしたって。そりゃ当然、法律家や警察官はさ、非法薬使えば捕まえるよ。だけど、その人にとっての正しい使い方っていうのが、あるわけだね。自分にあった見方.....たとえ

ば、「使っちゃいけない」という使い方もあるわけだよ。そこにたどり着くにはやっぱり、話させることがいいよね。

富永 はあ...

斎藤 あたしね、そういえばね.....荒川区だったかな。公立の、区のホテルみたいながあるんだよね。ラングウッド。

近藤 ああ、ラングウッドね。

斎藤 あそこの屋上で、ダルクの連中も何人か出てもらってね。半円の輪をつくって、壇上でミーティングをやっていたときにね。男の摂食障害とか引きこもりとか、いろいろいたわけだよ。そしたらダルクの連中が言っていたのはさ、「俺はシャブ中でよかった」って(笑)

一同 (爆笑)

斎藤 何がよかったんだって聞いたらさ、「男の拒食症なんて、なんか、みっともないじゃん」だって(笑)。シャブ中のほうが男らしい、とか言って(笑)

一同 (爆笑)

斎藤 そしたらね、最後まで黙ってた引きこもりの男がね、「特に言うことではないんだけど、ひとつだけ、新聞に出たことがあるんだ」って。それを言いたい、ってね。

近藤 えっへっへ...

斎藤 引きこもって、暴れちゃって、家庭内暴力をやっていたときに.....ガスに火をつけたっていうんだよね(笑)。吹っ飛んだっていうんだ、自分もともに(笑)

一同 (爆笑)

斎藤 それで生き残っていて、ちゃんと新聞に出たって。

一同 (爆笑)

斎藤 「ざまあみろ」とか言って.....(腹抱えて笑う)。牢屋の中の、「俺は何人殺してきた」みたいな話なんだけどもさあ。やっぱり、その迫力はさあ.....その前がダルクのシャブだった。その前は歯が溶けてなくなっちゃって、「あたし全部、入れ歯なの」なんていう摂食障害の奴でさあ(笑)。最後の「爆発した」っていうのは、一番ウケた(笑)

一同 (爆笑)

斎藤 みんなねえ、普通、そういうのは.....1対5くらいだと、まあやめておこうか、っていうような話でもさ、そこでノってくると.....みんなの目がこっち向いてくるとさ、興奮してくるでしょう、ひとりでに(笑)

富永 なるほど(笑)

斎藤 あれば、やっぱり、やったほうがいいよ。

(後半に続く)

コール依存症の治療のための基幹施設となっている。若年、成人、老人、女性など、それぞれのアルコール依存症に適した独自の治療プログラムを作成し、治療を行う。精神科では一般の精神疾患の他、摂食障害やAC(アダルトチャイルド)、薬物依存症などの治療も行っている。  
<http://plaza4.mbn.or.jp/~kurihama/>

3. 倉庫みたいなおとこ：東京ダルク。全国で一番最初にできたダルクで、倉庫として使われていた古いビルを改装して施設にしていた。

4. ミニーさん：メリノール宣教会の神父。日本での宣教師活動の最中にアルコール依存症になり、AAの12stepsプログラムで回復した。アパリ理事長のロイ・アッセンハイマー神父とともにMAC(メリノール・アルコール・センター：12stepsプログラムを用いたアルコール・薬物依存症の回復施設)の運動に尽力している。

5. 小沼先生：現・医療法人せのがわKonuma記念広島薬物依存研究所・所長。都精研(東京都精神医学総合研究所)で近藤恒夫が出会った、薬物依存者の回復活動に理解を示した精神科医の一人。現在も、ダルクやアパリの活動をさまざまな角度から応援してくれている。

6. AKK：「アルコール問題を考える会」のちに「アディクション問題を考える会」。アルコールや薬物・ギャンブル、買い物などの依存症や、摂食障害や虐待、夫婦間暴力などの嗜癖(しへき)、アディクション問題からの回復をめざす市民団体。

7. さいとうクリニック：斉藤学氏のクリニック。デナイトケアとして、摂食障害、物質乱用などの病状を伴う思春期障害、境界人格をはじめとする対人関係障害に悩む患者に対し、安全な場で時間を過ごし、人間関係の改善や生活能力の向上をはかるためのサポートプログラムを提供している。  
<http://www.iff.or.jp/>

8. 「アディショナル・ビヘビアの時代」：前号参照。

9. ボードレール：シャルル・ボードレールBaudelaire, Charles (1821-1867)。19世紀最高の詩人。パリに生まれ孤独な少年時代を送る。1857年の詩集『悪の華』は風俗壊乱罪に問われるが、内的な感覚世界を暗喩によって描写したその詩は象徴派の先駆をなした。阿片や酒に耽溺して詩作を続けていたとされる。

10. 新しく始めたプログラム：近藤氏は1983年に、薬物依存症の回復支援施設としてダルクのプログラムを始めた。

11. クリーン：薬物を使っていない期間。

12. サービス：12 stepsを用いた自助グループの各グループには、グループとエリアの連絡をするGSR、ミーティング会場の準備をするセクレタリー、献金を管理する会計係など、さまざまなサービスある。仲間の中で与えられたサービスの責任を果たしていくことが回復の上で大きな意味を持つ。

13. 名古屋、茨城：名古屋ダルク創設者の外山憲治氏と、茨城ダルク創設者の岩井喜代仁氏。全国各地のダルク普及に尽力したダルク創成期からのメンバー。

14. リラプス：直訳では「(症状の)再燃」。薬物を再使用し、症状がぶり返すこと。

15. 役割：自助グループ運営上の係、役割をもつこと。「サービス」。ダルク・スタッフの仕事もこの言葉で表現される。



注釈

1. 「ダメ。ゼッタイ。」運動：厚生労働省、都道府県、(財)麻薬・覚せい剤乱用防止センターによる、薬物乱用防止推進運動の名称。「ダメ。ゼッタイ。」を合言葉に街頭キャンペーン、募金箱の設置やポスターの掲示、子どもたちにシンナー等の危害について一声かける「一声運動」を行う。  
<http://www.dapc.or.jp/>

2. 久里浜：国立療養所久里浜病院。昭和38年7月に国立医療機関として唯一のアルコール依存症を治療する専門病棟が設置され、国立病院で唯一のアル

#### < 次回のお知らせ >

今回の対談は、合計2時間余にわたりました。いつものように前半・後半の2回に分けて全文を掲載いたします。

後半部分では、近藤さんの爆笑トークや、新人編集者ちえぞうの問題発言が炸裂します。斎藤さんのトラウマ理論に富永が懸念に喰らいつくシーンも見ものです。

どうぞ皆様、後半をお楽しみに!

#### < 司会 >

##### ちえぞう

愛を求めて全国を放浪するクロス・アディクト。前号からフェローシップ・ニュース編集に関わっている。

##### 富永滋也(とみなが・しげや)

1968年生まれ。APARI東京本部で回復者スタッフとして相談業務を担当。フェローシップ・ニュース責任編集者。

## 「命の洗濯」に行きましょう タイの薬物依存症回復プログラム研修報告

和高優紀（日本ダルク・スタッフ）



おはようございます。日本ダルクの和高優紀です。

今日、お集まりくださった皆さんは、薬物依存者の家族の方、ご本人の方、それから援助職の方……皆さん、本当に痛みを抱えて生きていらっしゃる……ほんの少しでもいいから希望をもって頂きたいと思っています。自分ではどうすることもできないけれども、いつか、どうにか切り抜けることができるように……ハイパーパワーの力が働きますように。ハイパーパワーの意思を、私たちがどうか、実行できますように。

タイでの研修は2度目です。今回は中央共同募金会より助成を頂き、3週間という長期の滞在でじっくり研修することができました。薬物依存の問題を社会福祉支援と位置付けるためにお骨折り頂きました、中央共同募金会の皆さんに、ダルクを代表して心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

最初にお断りしておきますが、私たちが回った施設のシステムについては、ほんの少しの誤りもあってはいけないことだと思いますので、今日はあえて話しません。行ってみてどう感じたかということ、私自身の言葉でお話していきたいと思います。

全部の施設の話をしていると時間がありません。そこで、一番収穫があったところからお話していきたいと思います。

### バンコク・タムクラボク寺院

まず、タムクラボク寺院に行きました。

2年前の研修のときにはさらっと通っただけだったんですが、その時、非常に不思議な言葉をいただいていた。一番偉い僧侶のソムデッド・ナンパーという方（現在は亡くなっています）は、800年前には日本にいたんだ、というお話を聞きました。不思議なことを話されるなあ、と思っていました。ほかに、「あなたたちは会うことになっていましたよ」とか、「あなた方とは一緒にこの活動をしていくことになっていたんです」などと言われ、あの時はすべてがおかしな話だと思っていました。帰国後、仏教では何百年単位でひとくくりとされていて、仰っていたことは不思議な話ではないということを知りました。「また来ることになっています」とまで言われて半信半疑でいましたら、その翌年、共同募金会の助成金のお話があったのです。自分の意志の力がか計画ではなくて、不思議とタイに行くことができました。奇跡が起きたな、と思いました。



寺院の一角。お寺の中に村があり、病院があり……ものすごく広い。

私たちの仕事について、お坊さんたちにこう言われました。

「アルコール・薬物の援助職はとっても危険ですよ。あなた自身が、身も心もボロボロなのに、そのうえ色んなことを背負っていけば、いつかは倒れる日がくる。いつかは間違いも起こってくる。それは本当に大変なことなんです。どうか跳ね飛ばして下さい。正しいこと、正しくないことが分からないまま全部背負っていくのはもの凄く危険だから、徹底的に自分の治療を優先させて下さい。何に對して線引きするのかを慎重に下さい」。

12 stepsについても、よくご存知でした。いま、インターネットにホームページが開かれたので、NA（ナルコティクス・アノニマス）のことや12 steps（NAのプログラム）のこともあつという間に解読されていたようです。こんなことを仰っていたのが、印象的でした。

「アルコール・薬物依存者にとって厳しいのは治療の最終章です。逃げ道がないでしょう。回復したら、もっと苦しくなっていくでしょう。過去の業を背負って、埋め合わせをして、自分の人生に責任を取って、自分を責めて。さらに仲間の手助けをして、仲間の業まで背負っていくのは本当に、厳しいでしょう？ あなたはいったいどうやって生きていけるんですか、その抜け道がもっと必要でしょう？ あなたがなった病気は、あなただけの問題じゃない。あなたが助からなかったのは、あなたの周りにいた人たちが皆、同じレベルだったから、助け出せなかったからですよ」

そうだったと思いました。私は依存者の家族ですが、私の家族のことを助けることはできなかった。「あなただけの問題じゃない」ということ……自分の先祖や親や、自分がしてきた業。生きていく上でやってはいけない悪い行い、つまり「マイナスの預金」がそれぞれにあり、私も同じレベルのところでした。

家族を助ける、ということで、実は自分にスポットライトを当てて欲しかった。「こんなに思っているのに、こんなにしておけるのに、どうして？」「どうして私じゃダメなの？ どうして私が、あなたのこと助けられないの、何でなの？」って。

お坊さんは言いました。「何か災いが降りかかったとき、相手のことを祈ってあげましょう。私たちにできることはそれだけ。そして、自分には責任は取れません、背負えませんが、理解できません。だからどうか偉大な力よ助けてください……という風に振り払う勇気を持ちましょうね」。

タイにクスリを使いに来て、底をついてしまうんでしょうか。お寺の入り口には世界中の患者さんたちがウロウロしていました。そして、青い目のお坊さん、黒い肌の人、いろんな人種のお坊さんたちがいて驚きました。

タトゥーが入っていたり、身体に多くの傷の残った僧侶たち。彼らは薬物、アルコール依存症の回復者でした。治療を受けた後、そこにとどまって、そして仏教の道に入っているわけです。彼らは私たちにこう言ってくださいました。「日本から来た人は、いろんな宗教をお持ちなんですよ。仏教の方もいれば、仏教じゃない人、カトリックの人もおいででしょう。私たちは弱いからここにいて僧侶になっていますけれども、皆さんは何を信仰しておられても問題はありませんよ。ここでは仏教の教義に基づいて治療プログラムを進めていますけれども、人それぞれの生き

方の問題で、哲学ですから、お寺だっていうことで構えないで下さいね。普通に私たちと過ごしてください。仏様を信じなさいとか解脱しなさいとか、そんなことではないんですよ。あなたが大事に思っている、慕っている、信頼を置いていること、それをそのまま信じて生きて下さい。

彼らはお寺の治療内容を説明したり、ガイドをしていました。それは強制的ではなくて、聞かれたことだけに答えていくものでした。その謙虚さに驚きます。

どこの国でも、どこの施設を回っても、薬物やアルコール依存者の回復支援は、同じ病気からの回復者が一番いい、といえます。タイでもたくさんの施設を回りましたが、どこでも、クスリを使った経験がなくて、何かを伝えることが出来ない人たち、というのはすごく謙虚に、回復者スタッフたちをサポートしていました。「自分が治してやる」とか「僕について来い」とかいうふうに支配している人が一切なくて、全て本人たちに任されている……回復している人たちがビギナーの面影を見ている形です。それも、必要とされた場合のみです。この謙虚さにも本当に驚きました。

依存者がお寺にたどり着いたとします。治療を受けるか、どうするかと迷いますよね。そうすると「何回来てもいいし、どんなに疑ってもいいよ」と言うんです。

治療については、お金は一円も取らないそうです。ただし、僧侶たちが食べているものを彼らが食べてもなかなか体力がつかないので、敷地内に沢山ある売店で、お魚、お肉、それからハーブのサラダ、ヌードルとか、そういうものを食べる。その食事代は負担してください、ということでした。「治療費は取りません。それは自分たちのルールに違反することです。苦しんでいる人のためや、お寺に何か施したいということでしたら、お預かりいたします」というのが、お寺の一貫したスタンスでした。

お寺の敷地はとても広いんですが、車で入っていったら、尼僧さんたちがコンクリートをこねて、病院を作っていました。最初は少年僧かと思ったんですが、小柄な、すごく利発そうな女性たちでした。作業に使うはしごも自分で作って、それで高いところに登っていく。真っ黒になって、鉄筋工のように一生懸命に働いていらっしやっ。もうちょっと進んだところには学校を作るんだそうです。

いいなと思ったのは、解毒治療の段階のサポートです。

薬物依存症者の治療というと、日本だとまずは精神科に解毒入院というのをします。点滴や、その他のお薬の力で抑えていきま

す。離脱症状はほかの患者さんたちの迷惑になる、と考えますよね。ここでは違いました。ヒステリーを起こしたり、鬱になったり、幻覚・幻聴がおかしくなったら、わーっとお坊さんたちが飛んできて、何時間だろうと無制限に助けてくれる。24時間体制のサポートなんです。

2メートルくらいあるオーストラリアの白人男性が、すごいヒステリーを起こしていました。そうしたら、山の上からドドドって3人、お坊さんが降りてきた。彼は「なんでこんなところに連れてきたんだ」とか「聞いてない」とか「虫がいる」とか「あの黄色い顔した人たちに囲まれておかしくなりそうだ」とか「基本的人権がない」とか、いろんなことを言っているんですけども、お坊さんはそれについて、子供をあやすようにゆっくり、ゆっくり説明していました。3日後には彼はなぜか頭を剃って、それまでは頑強に拒否していた、みんなと一緒に掃除をするようになるまでに落ち着いていました。

お寺の解毒のやり方は独特でした。お坊さんたちがまず、自分たちの敷地内で作っているハーブを煎じてジュースを作ります。それを飲ませ、薬草サウナに入って汗を出して解毒します。それから、薬草ジュースを飲んで吐く、という作業があります。人間の持って生まれた自然のパワーを取り戻し、吐くことによって元気が出てきたり、活性化されるということを生かした治療です。

それを数日間くり返した後、今度は仏教の教えに基づいて、いろいろ学んでいく。チームに分かれていって、将来どうするか、ここに戻らないようにするかどうかを決めてから、お寺を去っていく。多くの患者さんたちが「残りたい」と言っていました。

マッサージもありました。薬物によって身体の痛みとか壊れているところが違うので、この人にはこういうマッサージ、というのが別々にあって、それも僧侶が行っていました。

子供たちもいっぱいいました。学校の授業、薬物依存の予防教育ですね、その一環としてやって来るのです。観光バスでどこか来て、治療の光景を見て感想を書いたりとか、「サッチャー」を先に受けてしまうのだそうです。世界中からマスコミの方たちが取材にも見えていました。



タムクラボク寺院にて。右は日本担当のお坊さんです。



### 「サッチャー」を受ける

お寺に入るとまず、「誓い」を立てなければなりません。私はきっと、それが気になって二度行くことになったんだと思うんです。

「誓い」は「サッチャー」と呼ばれていました。「サッチャー」というのは日本語に訳すと「誠」とか「真実」とか「誠意」とか、そういうことのようなので。自分自身に対する誓いを立てるんです。

人間は、自然の中で生まれてきているものだから、あなたの体は、あなたの物ではない。お母さん、お父さんからもらったもので、ご先祖から来ているもので……ずっとたどっていけば、自然の、大地のエネルギーを借りて出来ているもの。神様から

解毒。薬草ジュースと水を飲み、前の溝に吐く。後ろの人々は歌って励ましている。



お話を聞く患者さんたち。お坊さんたちが毎日、わかりやすく話してくれる。

らった、神の器です。その器に薬物やアルコールや、まだ身体が成長していないのにニコチンやカフェインを過度に摂りすぎる、などという自分の身体を傷つける行いをするのは、非常に悪い業を積み重ねてきていることだそうです。

「クスリを使ってやろう」とか「これを使って生き延びよう」とか、そういう「誓い」が「悪い業」です。自分自身に対し、思いを行動に起こして積み重ねてきた確固たる「誓い」。それを打ち砕くのは大変なんです。その人の人生は、過去の悪い業でがんじがらめになっていて、いいことをしようと思っても過去の自分が絶対に食い殺してくる。

だから、新たに自分に対して「誓い」を立てるんです。人によっているんな誓いを立てていましたけれど、すごくシンプルなものです。まずは「クスリは二度と使いません」。それから「友人、知人、家族、自分を困らせるようなことはしません」。最後に「この誓いを守りつづけます」という、だいたいはその3つでした。

私たちも「サッチャーを受けますか」と訊かれました。迷って動揺して、「一晩、検討します」って、ホテルでみんなで「受ける？ どうする？」って相談したんです。

この誓いを立てたらもう、二度と破れない、というんです。「破ったらどうなるの?」「いや、破れないんですよ」って。「もうあなたは、迷うことはないんですよ。クスリを使わなくていいんです。家族ともう、揉めなくていいんですよ」と言うんです。「でも、もし破ったらどうなるんですか?」ってさらに聞くと「そんな質問しないでいいです。迷うことはないんです」。

私ももうひとりとはそう言われると「ああ、そうか。もう悪いことはしなくて済むのか」と納得してしまった。でもほかのスタッフは、なんだかだんだん具合悪くなってきて。それで「破ったらどうなるんですか」ってもう一度たずねたら、「使えない身体になっていますから、それなりの報いがきます」だそうです。怖いんですね。

次の日。お坊さんたちは待っていてくれました。「日本人たちは今までに何人このお寺に来たと思いますか? いろんな取材も受けましたし、研修という方々も見えました。だけど、こんなに食い込んできて私たちの治療の内容に興味を持って下さったのは、あなた方が初めてです」と言われました。「よほど日本で苦しい思いをしていらっしゃるんですね」「.....まったくもってその通りです」とお答えしました。

「それでは、サッチャーをどうぞ」という段になって、5人いたメンバーのうち3人は「じゃあ腹くくっちゃおうか」という気になったのですが、あとの2人がどうも.....様子がおかしい。実際に目の前で「一生破れません」とか「破ったら報いがきます」とか言われちゃうと非常に迷うわけです。今回はやめた人もいました。

スタッフの一人は「クスリは二度と、死ぬまでやりません」と誓いました。私は「家族を大事にし続けます」、そして一番最後の「この誓いを守りつづけます」ということを誓いました。もう一人は「兄弟や恋人や、知人、友人にひどい言葉遣いをやめませう」「クスリもアルコールも一生やりません」と誓っていました。いっぱい誓いすぎて、後でまた寝込んでいましたけれども、もうそれは、破れない。

お寺にはホットラインが開設されていて、世界中から電話が掛かってきます。「誓いを破ってしまった」と。するとお坊さんが、じゃあ次はどのようにステップを踏めばいいか、という提案をする。それがクリアできてからが治療なのだといいます。アフターケアがとても充実しているんです。

僧侶たちもまた、ラップ・サッチャーというのを受けていました。仏教の原理主義なのですが、言ったことは完全に守らなければいけない、というものです。「乗り物に一生、乗りません」という人もいました。車も自転車も、飛行機もです。「この寺から一步も外に出ません」という人もいました。薬物依存からの回復者で僧侶になった方は、「僕は死ぬまで、苦しんでいる人たちのために薬草を煎じて、サウナに火をおこし続けます」と誓っていました。彼は1日3回、ずっとみんなを勇気づけ励まして、サウナの準備をしていた。

### 自然の中で暮らす姿

お寺の方々は、今では政府の方々と一緒にやっておられるんですが、そのようになるまでには歴史があります。

薬物で苦しんでいる人の余りの増加、事件の多発に対し、タイ政府はオピウム(アヘンの原料)畑を全部焼き払った。そこで働いていた少数民族の人々は、やはり薬物を使い、過酷な条件で労働していた人たちです。パタパタ死んでいくしかない彼らを見殺しにするのかと悩んだ政府の人たちが、その頃は洞窟の中で修行していたタムクラボク寺院の僧侶たちに相談に行ったんです。すると「私は、彼らを回復に導く手法を持っています。あなたがたを待っていました」ということになりました。政府は、ほんの少しの土地を彼らに与えて、建物も一軒だけ建てた。それが始まりだったのです。

生き残った人たち、逃げ出した人たちを全部引き受けて、お寺の中に村を作ったんですね。今では世界中から治療に来た患者たちが僧侶になって、みんなで協力して、生活の場を与えている。だから尼僧さんたちが、病院を作ったり学校を作ったりもしていたわけです。

「お金が掛かるんじゃないですか?」と聞いたら「何が必要ですか? 私たちは何だって出来るんですよ。私たちが着ている服も、子供たちが着ている服も、自分たちで全部、作っています。食べ物だってありますよ」って言われてしまいました。

確かに、その周辺は、土壌のミネラルが半端じゃないらしいんですが、普通では考えられないような場所でした。大きな、オバケみたいなヘチマがなっていたので「大きいヘチマ!」って驚いたら、バナナだと仰るんです。「これ、違う種類でしょう?」って聞いたんですが.....バナナなんですね。敷地内で作っているハーブも作物も、ものすごく大きい。すごいところでしたね。

その土にもいろんな色があって、絵の具を作ったり、クレヨンを作ったりしていました。ここにたくさんいるホームレスの子供たちに配ったり、アートセラピーという形でそのクレヨンを使って患者さんたちが絵を描いたりもしていました。

日本では、自然を忘れて、自分の頭だけでいろいろ空想し



これから薬草サウナに入るところ。



て、いろんなものに頼って生きているかもしれませんが、本来ならば、すべて自然の中から生まれてきている私たちですから。ここの場所がとってもいいんだ、どうしてもここなんだ……という風に私は感じました。

「雨が降っていても傘をさしている人がいないでしょう？ お化粧している人もいないでしょう？ 洋服は人間の羞恥を隠すもの。食べ物は命をつなぐもの。雨は、人間の悪いものを取り払ってくれるもの。そういうものなんですよ。」

私たちは時計に縛られて、時間に縛られて、条件に縛られて生きているから、依存症の人たちの治療もしづらい。素足で歩いていたりだとか、一生懸命掃除をしたりだとか、お祈りしたりだとか、お話をしたりだとか。動物をどこからか持ち込んできたり、拾ってきたり。少数民族が連れてきた犬が繁殖して増えちゃって、とか……人々が群れになってじゃれ合っている姿を見て、羨ましいと思いました。

自然の中で暮らしているその姿は、建物の中で勉強したりOA機器に向かってカリキュラムを組んでいるアメリカとはまったく対照的でした。タイの風土がなせる技でもありましたね。とっても心地よかったです。

### マイナスの貯金

すごく分かりやすい話をいろいろして下さいました。毎日、ちょっとずつ、一生懸命に話してくれる。

多くの人が、何が悪いことなのか、分かっていない。まず、それを知っていきましょう。人間の体はガラスのコップのようなもので、いつもカラカラだと、水を汲みにいきたくなくしてしまう。でも、コップの中に誠意、愛、よい行い、信じる気持ち……それらを満たしている、もう池や水道に水を汲みにいかなくてもいいんです。水がなくても、入っている状態に保つことができる。

自分が困ること、家族が困ること、大事な人たちが悲しむようなことをやめる。それから、「マイナスの預金」をそれ以上、増やさないようにする。

「マイナスの預金」というのは、嘘や盗みや、口の業、手の業、いろんな悪いことを犯していくことです。そういうものがだんだん積み重なって来た時に、あなたは足を引っ張られる。あなたが本当に、ちゃんと生きていこう、まじめにやろう、幸せになろう、何か求めようとしても、そのときに足をすくわれてしまう。

「怖い話をしてあげましょう」と言われました。「あなたは東京ですね」「はい」。「事務所がありますね」「はい」。すると「コピー機がありますか」「はい」「電話」それから「ペン」「イス」「オープン」「エアコン」「コップ」「かばん」「じゅうたん」……それらのものは、粗末に扱ったこと、感謝もなく、ひどい扱いをしたことを全部記録して、やった本人は忘れてしまっても、それはマイナスの預金として残るといいます。「たとえそれが自然のものではないにせよ、人間が作り出しているものだから、全部魂があるから。どうか愛情を持ってすべてに感謝して生きて下さい。そうしたら、いいことをしようと思ったときに、全部のエネルギーが働いて、あなたの背中を押してくれるんです」。

食べ物についても教えを受けました。「食べ物にも全部、命があるでしょう。フルーツも野菜も、豚、鳥、牛、お魚。全部命があって、自然から生まれてきたものでしょう。それを、好きなときに好きなものだけ食べて、いらなくなって残せば……命を奪っていい行いをしなければ、報いがくるんですよ」。

「新たな決意、新たな約束を実現しようと思ったら、決して自分ひとりの力で乗り越えようとするのではなく、全ての魂のあるものに祈りなさい。力を借りなさい。イメージして下さい。大地の自然のエネルギーをあなたの身体に取り込むというイメージを

して下さい」。人間の身体には14箇所、自分でコントロールできるポイントがあり、疲れないようにする、血色を良くする、悲しまないで済むようにする、凝りをほぐす、などというトレーニングの方法があるそうです。あまり時間がなく全てを習得することは出来なかったのが残念です。

とにかく驚きの連続でした。お寺の中に村があるというところから始まって、お坊さんたちがみんな元依存症者ということ、お金が要らないということ。いつでも受け入れてくれること。

薬物依存のケアはとて大変です。私たち自身の身も心もボロボロで、いろんな業を背負って、自分自身のケアもしながら、しゃかりきになってやらなければならない。非常に消耗します。だから私たちもここで患者として治療を受けたいと思いました。すると「ひとたび治療を受けてここで過ごしたら、ここにはもう二度と踏み込めないんですよ。だから、研修生のままでいいんじゃないですか」。そう提案して下さいました。

「いつでも逃げてきなさい。この大地のなかであなたが過ごす時間、必要でしょう」と。「4月には全員が歩くんです。一年間に積もった業を振り払うために。だから私たちは出かけています。テント持参でついてくる人もいますけれどね。だから、それ以外なら、いつでも逃げてきて休みなさい」と。こうも言ってくださいました。「もしすごい重症の方がいたら、自然の中に帰してあげた方がいい人がいたら、無償で引き受けます。飛行機に乗せて連れてきてあげなさい」と。それはやはりクルリのメッカですから非常に怖いんですけど……その人がどこまで回復を求めているか、とか、行っても空港でいなくなっちゃうんじゃないか、とか、考えてしまうんだけど。交通費と食費だけで引き受けてくださるといいますよ。びっくりしました。本当に、ありがたいことですね。

私たちダルクスタッフの仕事のためにも、これからいろんな提案を頂きたい。スーパーバイザーになって頂けたらと思います。本当に沢山のことを教えてもらい、与えてもらいました。

たとえば、子供たちへの予防教育にも、とっても役に立つんです。子供たちへの薬物依存症の予防教育をどうしたらいいかと、ずっと頭を悩ませていたんです。お寺で教えてもらった分かりやすい講話を、子供たちに話せる機会が本当に多いんです。

### チェンマイにて

タイ北部の麻薬退治センターというところの、シバリーさんという方のお話を伺いました。彼女は2000年の日本でのNAコンベンションに来日なされたので、NAメンバー（薬物依存症本人）だと思ったら、そうではなかったんですね。

タイですごく驚かされるのは、シバリーさんのように政府のプロジェクトとして、薬物依存者ではないのに、世界中で治療を受けてくる。そうやって身につけたものを「あとはあなたたちでやって下さい」という形で、薬物依存症者の本人たちに返していくんです。そのようにしてタイにNAも、自助グループも持ち込んだ。政府がすごく協力的なんです。彼らはとても謙虚で、依存





シバリーさん(右)と。

症者たちへのコントロールもなければ支配も、命令もない。いいと思ったことは貪欲に勉強して全部、持って帰ってしまう。おそるべし、と思いました。

そのシバリーさんが依存症に関わる援助職の教育を始めた聞き、お会いしてみたいと思ったんです。なかなかお時間が頂けなくて、ほんの少しだけお話を聞かせて頂いた中でも驚いたことがありました。

薬物依存はやはり「家族の問題」として考えていました。三者面談を何度も繰り返す。お互いにどこまで協力できるか、話し

合う場を設けたり、治療に関する見届け人みたいな存在をつけたら。そういった考え方を広めるためにタイの全土を回っていらっしゃる。

自分の身体の声を聞いて、どこが辛いのか、痛みがあるとか、熱があるとか、苦しいのか.....それを自分で探して、自分で癒していくというケアもありました。マッサージやハーブを使ったケアもありました。そこで治療を受けた人は、それで食べていけるようにトレーニングをするんです。「そういうケアをする施設を作りましたから、どうぞ来てください。ダルクの人たちは無償で受けましょう。交通費と食費だけは用意して下さい。ともに勉強してゆきましょう」と、シバリーさんは約束してくださいました。今度ぜひ、長期で滞在して、メディテーション(瞑想)とか、スピリチュアルなケアを受けてみたいですね。

### サバイチャイ - 埋め合わせ

ミニットマイという施設にも行きました。ここはカトリック教会が無償で経営している、薬物依存症の回復支援施設です。

まさにダルクと全く一緒でした。自らも回復者である施設長がクスリにはまっている人たち.....薬物依存だけのお金のない人、教育を受けていない人、重複障害の人、村の少数民族の人たちなどを連れてきて、この施設で面倒を見て、仕事の斡旋をしります。そんな施設でした。

とてもアット・ファミリーなところでした。どこに行っても、患者さんたちとの交流が自由であることに驚きました。私たちの施設では視察に来られると、写真撮って欲しくないな、どこにも公表してほしくないな、プライバシー守ってくれるかな、ヘンな関係にならないかな.....などと、いつもすごく緊張してしまふ。ミニットマイは違った。「会いに来てくれたの?」なんて言ってくれたり。ぜんぜん、クローズド・マインドじゃないんです。

ここで印象に残っていることは、「自分でしたことへの埋め合わせ」ということを、とても重視していたことです。「サバイチャイ」という言葉を教えてくれました。これは「心地よい」「幸せなこと」とか、そういう意味だと思います。

施設長が仰っていました。「私にとってのサバイチャイは、子供たちがこの施設にいっぱい入ってくることで、仲間と会わせてあげること。そうすることがものすごく幸せです。僕は一人で歯を食いしばっていた。間違っただけを信じて、間違っただけで生きてきた。本当に孤独でした。いま、僕は、困っている人を助けてあげることが出来ないけれど、連れてきてこの子供たちと会わせて、血のつながら

ない兄弟を作っておくことが本当に、自分に対して『よくやったぞ』と言える言葉です」。

私も、同じことをやっているんだと思いました。本当にもう切羽詰って、今晚をどう乗り切るか、というような、依存者のご家族がダルクの家族プログラムにいらっしゃる。私には本当に何も出来ないですけど、仲間意識を持って頂くこと、その環境を用意することをやっている、と思っています。その場で、3ヶ月くらい前、嬉しいことがありました。

ある方が夫婦でおそろいのバッグを持ってミーティング会場に入ってきたんです。それをぱっと見たときに、目頭が熱くなりました。「ああ、これで本当に、孤独から解放されたんじゃないかな」って感じた。聞いてみたら、一緒に神社めぐりをしたって仰るんです。良かったなって思いました。

私もかつて本当に一人ぼっちで、仲間の中にも、全然オープンにならなかった。人が信じられないし、自分も信じられない。何を信じていいのかも分からなかったし、私こそ、間違っただけを信じていました。だから、人がだんだんと打ち解けていく瞬間を見たときに、自分のことのように嬉しい。本当に、何にも替えがたい気分を味わうことがあります。援助職としてダルクでお仕事させて頂いて、すごく過酷なんですけど、たまにはそんな瞬間も、あります。

自分自身のことに関しても、嬉しいことはあります。

「あのときの私に戻りたい?」って、もう一人の私がよく自分に聞くんです。私の共依存がマックスだった時代.....相手のことばかり考えてしまっ、とらわれてしまっ、命令したり強制したり。それからもう一つパワフルに動いていたのが「なんで私じゃ助けられないんですか」「どうして私じゃあなたの役に立てないんですか」という嘆き。これらが複雑に入り乱れ、すごく悲しかった。

でも今にして思えばあのときが.....食うか食われるかのマックスだったあの頃が一番、本当の意味で家族だった。それぞれが「私だけは悪くない」って鬼の形相で絡み合った。恥ずかしかったしやめたかったし、「どうしてうちだけ?」って思っていたけれど、あきらめなかった。それはいま思えば、人として当たり前の道を通っただけだったんじゃないか。やっぱり家族だから。大事な人だから、そうなってしまっ、と。そう思っているんです。いまは私が私自身の過去を肯定的に認められるし、この先いいことが起きるんじゃないかという風にも思えるのです。



ミニットマイにて記念撮影。ダルク・マックスのスタッフ達もすっかり馴染んでいる。



ミニットマイ。どこかダルクの雰囲気似ている。立っている男性が施設長。

### 引き算のプログラム

最後に、今後の、海外でのスタッフ研修の意義についてです。私がとても気になっていた、クリーンが長い回復者スタッフたちのケアとして、素晴らしい成果を得たのではないかと思います。

薬物依存症の回復者は、クスリが止まったらすぐにハッピーというわけではありません。自分自身の新たな苦痛と、それからどう生きていったらいいかという問題に直面しながら、仲間のケアをしなければならない。そんなスタッフたちの、それこそ息抜きと……もうちょっと勇気付けたり励ましたり、お互い回復したことを喜び合ったりとか……ずっと求めていたそういう場所を、見つけられたのではないかと思います。

スタッフたちは、日本では学ぶところがなくて、いつも壁にぶち当たるんです。自分たちの葛藤の裏づけが取れなくて「どうしたらいいのかわからない」という答えがいつも、見えてこない。答えのないまま現場で悩んで悩んで、どうにもならない……で、そのまま燃え尽きていってしまうようなことが当たり前なんです。

私は、薬物依存者の家族です。アルコールに溺れたことも、男性依存に走ったこともあります。でも、そういうところから回復できたことについて、私自身の人生の体験にも、ダルクの仲間や依存者の家族の仲間たちとともに今日、ここまで来れたことにも、プライドを持っています。仲間たちと、自分のことを誇りに思っています。

ところが、何人かのスタッフたちは、罰としてダルクにいるのです。社会で生活できないから、罰として施設にいて、過酷な日々を自分に課して無理して留まっている、そうやって悩んで苦しんで燃え尽きていく……という仲間も、数多くいるんです。そんなスタッフたちはいったいどうケアされればいいのかわからない。

アメリカには、驚くほどの沢山の病院や施設があり、依存症の支援に関して足りないものはないくらいでした。一人の患者さんに6人のカウンセラーが付くという羨ましい体制は、入寮した患者がそのプログラムに従い勉強し、リカバードカウンセラーになることで支えられています。ちょっと驚いたのですが、アメリカでの依存症治療の考え方というのは、アルコールや薬物の依存者を回復させずに放置しておく国にどれだけの赤字が出るか、と計算する。その彼らが回復したら、何百人、何千人を助けられるか、というのです。「彼らは私たちの財産なんですよ」と言っていました。すごいなと思いました。

アメリカのプログラムは、「足し算」だと思いました。いろんなグループワークに出たり、カウンセリングを受けたり、自分に合うカウンセラーを選んだり、新たなものをどんどん付け加えていく。「こういうことがあったから、こうしていきましょう」と、自分自身に対する病識を高める。回復して社会的地位も獲得する。社会に役立つ人間になる。そうやっているんなことを「足

して」いくんです。

でも、アメリカでの研修は40万円くらい掛かるんです。帰ってきたその日から貯金なんです。1年に1回研修を受けたいと思っても、すごく大変です。現地でも、朝から夜遅くまで軍隊のようなカリキュラムが組まれていて、体を壊している人なんかには無理だし、「ちょっとついていけない」という人もいました。アメリカのやり方も素晴らしいんですが……お給料が貰えて、社会的地位もあって、人の役にも立てて、さらに自分の治療もできて、まさに言うことなしなのに、行くと反対に落ち込んで帰ってくるんです。「だけどなあ……僕たちはなあ……」って。

ところがタイに行ったら、余計なことは一切、させない。「引き算」なんです。人間本来の姿にすごく落ち着けたんですね。そこがダルクのやり方に似ている、日本人にはすごく合うなと思ったんです。

アメリカとは切り口が全く違う。「人がどうあるべきか」ということなんです。クスリとかなんとは、ちょっと置いておく。薬物依存症、自分が背負ってきた罪、業、自責の念……そういうのもちょっと置いておいて、自然の中にポーンと返してくれた。それが忘れられないんです。

そういう切り口が、もしかしたら日本人には一番、合っているんじゃないかと思いました。もともと同じ農耕民族ですし、仏教という宗教的背景も少し共通しています。ここが合わない人なんていないんじゃないか、と思うほど、私はしっくりしたんです。

これからも、年に一度は訪れたい。疲れきっている援助職の仲間たちと一緒にいきたい。お医者さんや看護婦さん、弁護士さん……依存症の仲間に関わって自分の力を使わなきゃならないような人たちが、もう一回、人間としての原点に戻れる、文字通りの「命の洗濯」ができる場所じゃないかと思いました。

もっと教えてもらいたいし、もっと素直になりたいし、「これでよかったんだ」って、自分たちには未来も希望もあるんだ、ということをもっともっと知りたい。また、自分の力、人の力、ということだけじゃなくて、自然の中に帰って大地のエネルギーを借りて、変わっていくことが出来るんじゃないかと思えたあの場所で、研修をこれからも続けさせて頂きたいと思いました。

まだ2回目なので、そんなに核心に触れたお話をすることが出来なくて残念なんです。すごく大きな収穫でした。沢山の皆様のご協力のおかげで、沢山の出会いや希望を与えていただくことが出来ました。本当にありがとうございました。

平成15年3月16日 アパリ公開講座～薬物依存回復の可能性をさぐる～での講演を再構成 (文責 ちえぞう:フェロシップ・ニュース編集部)



今回、研修に参加したダルク、マックのスタッフたち。おつかれさまでした。

## サルでもわかるアディクション講座 第7回 メッセージ

五月晴れの平和な午後。平穏ならざる電話があった。  
トルルルルル.....ガチャ

**相談員** はい、アバリです  
**サル** ぼ、ぼぼぼボクは.....うわあああ！！  
**相談員** .....サルさん？  
(がちゃん：硬貨の落ちる音)  
**サル** もうだめだーウッキー！  
**相談員** 今度はなにがダメなんですか？  
(がちゃん)  
**相談員** サルさん？ 公衆電話ですか？  
**サル** うわあああぼぼボクはな  
(がちゃん！ ツー、ツー、ツー.....)

なにごとだ？ とにかく生きてはいるらしい。遠くにいるらしいが.....するとほどなく、  
トルルルルル.....ガチャ

**相談員** はい、アバ..  
**サル** うわあああ助けて！！  
(がちゃん)  
**相談員** サルさん、どこにいるんですか？ .....もしもし、もしもし？！  
**サル** .....  
(がちゃん)  
**相談員** とにかく東京に帰っていらっしやい、そしてミーティングに出るんです。待ってますから。  
**サル** 何がミーティングだよ！！ 誰もボクのことなんかウキキキー！！  
(がっちゃん！)

.....数日後、  
トルルルルル.....ガチャ

**相談員** はい、アバリです  
**サル** .....アディクトのサルです  
**相談員** ああ、帰ってこられたんですね？ よかった！  
**サル** .....ボク、ミーティング怖いんです。もう.....もういきたくない.....なんかみんなでわけのわからないことをして.....またボクをのけものにしてー！！  
**相談員** またですか？ いったい今度はどうしたんですか？  
**サル** いろいろ、きかれるんですよ、わかんないことを。  
**相談員** 何を？  
**サル** 「パスデーは？」とか、「ホームはどこ？」とか「スポンサー湿布がどうの」とか.....そんな回復の秘密メニューがある



のに、ボクには教えてくれないなんて！ ケチ！ いじわる！ ウキキーっ！！

**相談員** ひ、秘密メニュー?? うーんそれはともかく.....きけばいいじゃないですか。  
**サル** きこうと、思ったんですよ。それで.....そのためには.....

**相談員** そのために？  
**サル** どうしてもケータイを買わなきゃいけない、と

**相談員** な、なんでそうなる.....？

**サル** (それには答えず、せっぱつまった様子で) そのためにはお金が.....わかったんですよ。ボクの回復にはお金が必要なんだたくさん！

**相談員** う〜ん.....？ そ、そうか、そう考えたか。

**サル** ボクは働いて働きまくって、ガンガン金稼いで回復するんだーウキキキー！！って、ボクの完璧な猿生計画のもとに、まずは日光に.....

**相談員** 日光.....サル軍団？

**サル** あそこにはそれなりに、いろいろあるんですよ、サル産業が。

**相談員** そ、そうなんですか。じゃあ、働いてたんですか？

**サル** 日光に着いたときにはもう、サルバイト情報誌を買うお金も残ってなくて、マトモな仕事は見つからなくて。やっとありついた仕事が、一日、『見ザル』のパフォーマンスをする、という.....一日うずくまって目をこら、手で.....

**相談員** ぶっ(笑)。.....それで？

**サル** もちろん翌日は「聞かザル」、その翌日は「言わザル」.....3ヶ月エンドレスで、って.....

**相談員** ぶはははは！(爆笑)

**サル** (つられて笑いながら) ぶ、ぶははは.....笑いごとじゃないっすよ！ もうボク、頭がおかしくなりそう.....でも、がんばろうって。胸張って東京帰るためにここは耐えるんだ、って。ボク、がんばりました。見ザル聞かザル言わザル、見ザル聞かザル言わザル、見ザル聞かザル言わザル.....う、うううわああああ！！

**相談員** うわあ.....また、無理したんだなあ。

**サル** 道行く人びとに無視されあざ笑われ、道ばたのゴミってこういう気持ちなのかもしれない、とか.....ゴミのほうはまだましかも、とか.....だんだん、だんだん奴らの笑い声があた、ああああアタマにこびりついて.....

**相談員** うわーキツイなあ.....

**サル** .....給料日までと云わザル見ザル聞かザル言わザル、って思ったとたんあああいつ、あいつが.....

**相談員** で、出たか.....幻聴さんが。

**サル** ぼ、ボクは走り出した夜の日光の森を。本家の左甚五郎作を焼き討ちすればきっとボクはボクは.....なんか、おかしくなってます。世界じゅうのかわいそうなサルを救うつもりでした。それで.....それで、

**相談員** 火をつけた？

**サル** いえ。気がついたら賽銭箱に手をつっこんでました。逃

げることしか考えられなかった.....なんで、なんでこうなったんだらう.....こんどこそうまくいって思ったのに。だって、前と違って、ボクは自分の回復のために一生懸命.....3ヶ月働いてお金さえできれば、クスリも止まって回復して猿生バラ色が約束されてたハズだったんだ、なのに.....やばい、このままじゃまた前と同じだ。使っちゃう！ って思って、賽銭泥棒してなんとかアパリに電話をかけて.....

**相談員** ああ、あの電話、そうだったのかあ。

**サル** (がっくりと声のトーンを落として) ああ、ボクはまた、何もかも失って.....

**相談員** ちょ、ちょっと待って。ちょっといい？ そもそも、なんでケータイが必要だって思ったんですか？ どうも僕にはわからなかったんだけど。

**サル** だってね、あの女の子が.....アドレス教えてくれたコが、「サルさんホーム決まってるの？ ジャーここでバースデーやんなよ」って。でも、なんのこともかさっぱりわかんなくて。せっかく親切にしてくれてるっぽいのに、ホームだかバースデーだか湿布だかをちゃんとやれば、きっと親切に応えられるのに、ボク何もわからないし.....だから、いまケータイがあってメールさえできれば、プログラムだか何だか、みんなの秘密メニューのこともわかって、みんなともうまくやっていけるって.....それがなくっちゃ、ミーティングだって行けやしないうって思いつめて.....

**相談員** そうかー。要するにまた、仲良くなりたい、ミーティングでみんなとうまくやっていかないと回復しない、ってテンパっちゃったのか.....それで、出稼ぎに出た、と。

**サル** で、やっぱりダメだったというか.....だって、前もボク、なんだか同じこと、言ってきましたよね。仕事キツくてどうしようもなく、クスリ使ったら余計なんともなくなくなって、相談員さんに教えてもらって初めてミーティングに出て.....そうだったはずなのに。ボクまた同じことやってたんだ.....

**相談員** 本当はミーティング、すぐ行きたそうなんだけど。

**サル** だって.....

**相談員** だってもへちまもバナナもありません。ミーティングでハイパーパワーに、話すんですよ。

**サル** またわけのわかんないことをー！！ ウッキーッ！

**相談員** 行きたいんでしょ？

**サル** うっ.....

**相談員** だって、使っちゃえば、よかったじゃないですか。なんで使わずに戻ってきたんですか？

**サル** うううー。だって.....ボクもうイヤだ.....もう、使いたくないんだ.....とにかくもう、あんなふうにならなくなかって.....とにかく.....

**相談員** とにかく行ってみたらどうです？ みんな待ってますよ。

**サル** それ、前も言ってたけど.....誰もボクのことなんて覚えちゃいませんよ。

**相談員** 待ってるんですよ。「まだ苦しんでいるアディクト」であるサルさんを。まさにサルさんみたいな人、いやサルのためにミーティングってあるんだし、そこから生きていけるんだ、回復ってあるんだ、って伝えるために仲間が集まるんです。また、伝えることで回復していきんです。サルさんが回復の「メッセージ」をもらうことで、仲間も回復していきんです。

**サル** .....ウキキ？

**相談員** それにね、サルさんがミーティングに来ることが.....そのことがまさにみんなにとって「メッセージ」なんですよ。

**サル** メッセージ？ .....ウキキ？

**相談員** またテンパって、お金とかモノを持つことで力をもとうと、力にしがみつこうとして.....という同じ間違いをしてしまった。でもそのなかで、使わないほうを選べたこと.....何よりも、生きて戻ってきたこと。仲間メッセージ.....伝えてください。

生きてた、戻ってこれた、って。僕らは、伝えること.....メッセージすることで、回復していきんですよ。

**サル** なに言ってんですか？ 仲間に伝えることなんてないよ。アホでサルで、失敗して、回復できなくて.....また醜態さらして.....

**相談員** なに言ってんですか。サルさんの冒険談、サイコーでしたよ！.....ほんとうによく、戻ってきましたね。それはサルさんの力ですよ。生き抜いたじゃないですか。

**サル** えっ？ 生き抜く力がないから、逃げてきたのに。

**相談員** サルさんはミーティングがキラミたいだけね。サルさん、もう、自助グループで回復してるじゃないですか。使うことを選ばずに、生きることを選んで、キラミなはずのミーティングに戻りたくて.....戻ってきたサルさんを、ハイパーパワーは、プログラムは助けてくれますよ、これからも。

**サル** また秘密メニューの話ですか？ 何言ってんだかわかんないけど.....とにかくほかにどうしようもないってことはわかりました.....行ってみますよ。

**相談員** 待ってますよ！

後日、梅雨空の昼下がり。サルから再び電話。

**サル** 全部しゃべったらなんだか.....バカウケして、ハグの嵐でした。

**相談員** よかったじゃないですかー

**サル** ケータイなくても、きけばいいだけの話だったのに。秘密メニューのことだって、焦らなくてもちょっとずつきいていけばいいんですよ。ボクなんであんなにテンパっちゃったんだろう？ なんかバカみたいですよウキキ。

**相談員** (なんでそれが最初からわからんー！と心の中でツッコみつつ) そ、そういえばそうだったですよねえ。

**サル** そういえば？ なんだよそれー。あーでもボクやっぱり、ケータイ、ほしいなあ.....

**相談員** まさかそれ、女の子と仲良くなりたいだけ？

**サル** そうかもしれないです。ボク、つまらないことでテンパってたんだなあ！ 相談員さん、ありがとうございました。ウッキキー！

(編集部注：秘密メニューっていったい.....?! サルのプログラムはどうなるのか?! これからにご期待ください。)



構成 : ちえぞう  
アドバイザー : プーさん・シゲヤ

## 神無月才生の好評連載

# ラブ&マーシー

## ビーチボーイズ： ブライアン・ウィルソンの光と影

### 第7回 「神との対話」

#### 陽と陰

一台の車が、同じブロックをグルグルと回り続ける。陽光が照りつけるロサンゼルスの高級住宅街ビバリーヒルズ。

運転しているのはビーチ・ボーイズのリーダー、ブライアン・ウィルソンで、LSDを吸いながらメンバーのアル・ジャーディンを乗せて走る。「一緒にLSDをやるって約束しないとだめだ。人生が変わるぞ!」と叫びながら。

堪忍袋の尾が切れたアルは無理やり車から降りた。ブライアンはうつろな表情で「神を信じるか?」と詰め寄る。アルは「君は完全に狂ってるぞ。ドラッグをやめろよ」と言い残して去った。

薬物が天才の心と体に乗っ取りつつあった1966年、ある初夏の日のことだ。

不朽の名盤「ペット・サウンズ」を作り終えて、ブライアンが次に目指したものは何だったのか。今回からの2回は、絶頂期を迎えていたブライアンが、結果、自らを廃人にして終えた未曾有のプロジェクト「スマイル」を検証していこう。

66年4月。ブライアンは「ペット・サウンズ」制作中に着想を得ていたものの、ひとまず棚上げにしていた「グッド・バイブレーション」セッションを再開した。「ペット・サウンズ」でも活躍した西海岸の腕利きセッションメンが集結。クラリネットやハーブ、電子楽器テルミンなど、ポップスには珍しい楽器が導入され、シングル曲にかかる費用、時間としては当時異例の7万5千ドル、半年を要する大プロジェクトへと発展していく。

「『グッド・バイブレーション』は僕の音楽のビジョンを総括し、想像力、才能、制作価値、技巧、作詞作曲と精神性のある見事な融合になるだろう。僕はスペクターのような壮大なレコードを作ることを思い浮かべていた」(「ブライアン・ウィルソン自叙伝」(中山啓子訳、径書房)より)

ブライアンと他のメンバーの溝は決定的になっていた。相変わらず陽気な男の子を演出してコンサートを沸かし、グループの「陽」を担ったメンバーたち。天才の名をほしいままにしたブライアンは一人スタジオ



ブライアン・ウィルソン(左)とヴァン・ダイク・パークス=1966年

にこもり、「陰」の支配者として、完璧な音作りにこだわる。

このころ、ブライアンはドラッグを最初に教えてくれた友人ローレン・シュウォルツを介して、ヴァン・ダイク・パークスというミュージシャンと出会う。早口で物知り、斜に構えた物腰。ウィットに富むヴァン・ダイクはブライアンの心をたちまちとらえ、アンフェタミンの世界へと誘った。

#### 自然の報復

「僕には次のアルバムで進むべき方向が分かっていた。『グッド・バイブレーション』の世界をさらに展開させることだった。三年間、ずっと対峙してきたクリエイティブな状況のピークに立っていた。僕は自分の地位を築き、たった一人で頂点に立ち、希薄な空気を吸っていた。しかし、自分自身を立証したいという本能的な願望を満たすものは何もなかった。僕はさらに前進しなければならなかった」

5月。ブライアンは新たに作ったメロディーをピアノで弾き「考えているタイトルは『ヒーローズ&ビレインズ』(英雄と悪漢)だ」と告げた。聞いていたヴァン・ダイクは「西部の町を連想させるからぴりりなタイトルだ。曲にはストーリーが必要だな」と言うと、精神を集中してしばらく考え込み、すらすらと歌詞を語り出した。

「はるか昔、俺はこの街にいた  
そして今、戻ってきたのさ  
俺は死んでも同然に扱われ  
長い、長い間、誰にも知られずにいた  
恋をしたなんてのは、何年も前  
相手はスペイン人とインディアン  
の混血の  
あどけない少女だった  
英雄と悪漢が住む町に生まれた女さ」

ここに、新たな作詞作曲コンビが誕生。ニューアルバムの仮タイトルは「ダム・エンジェル」と決まった。少年時代に抱く感情の機微を描いた「ペット・サウンズ」のテーマをさらに拡大し、ここでは「神にささげるティーンエイジシンフォニー」がコンセプト。2人は「神との対話」を恐れることなく、2千ドルのマリファナとハシシを用意して創作活動へ没頭する。

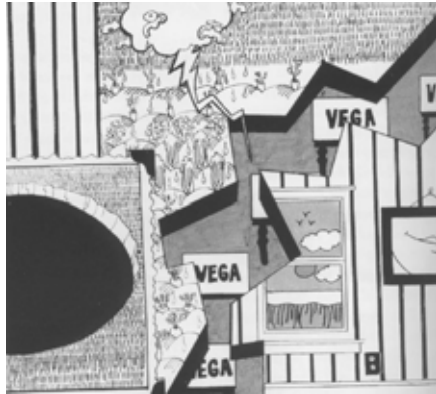
「英雄と悪漢」はさらに、主人公の少女が戦いの仲裁に入り、撃たれて死ぬ場面へと展開する。

「ある晩、戦いが起こり  
彼女は弾丸の雨の中に居合わせて  
撃ち抜かれ、倒れた  
でも彼女は野郎どもをももともせず  
今も夜の闇の中で踊っている  
この英雄と悪漢の町で...」

アメリカの大地が持つ温かみと自然の容赦なさ。そこに力強く生きる開拓の民。ヴァン・ダイクの持つストーリー性とブライアンが作り上げた音のタペストリー。「英雄と悪漢」以外に66年夏から秋にかけて、ブライアンとヴァン・ダイクが書き、録音されたのは次のようなナンバーだった。

シンプルなハーブシコードの演奏をバックにブライアンが美しいファルセットを聞かせる「ワンダフル」。ティンパニなどの打楽器を多用、謎めくハワイ語の歌詞でつづる「ドゥ・ユー・ライク・ワームズ? (ドゥ・ヤ・ディグ・ワームズ)」。マリンバでそよ風を表現した涼しげな「ウインド・チャイズ」。

これらは後になってからボックスセット「グッド・バイブレーション・ボックス」などで発表され、完成形に近い音が聞けるが、開発を続ける人類と自然の報復により全てが消える様を、どよめくようなコーラスで表現した「キャビネッセンズ」はとくにすばらしい出来だ。



「スマイル」のライナーに用意されたイラスト

## 予言

アルバムには「バイシクル・ライダー」と呼ばれるメロディが何度となく登場して全編をつなぎ、メインテーマの役割を果たすはずだった。たまたま乗ったタクシーの運転手にユーモアのセンスを感じ、ブライアンがポータブルのテープレコーダーを回したこともあった。

「僕は音が出るものであれば何でもアルバムに使うことと結びつけて考えていた。たとえば、ディナーの皿をフォークでかちっと叩くのを合図に、全員にグラスや皿をフォークとナイフで叩くよう頼んだ。パーで本当にパンチの応酬をしたり、椅子やテーブルを壊す、昔の西部劇スタイルの騒々しい喧嘩を再現してくれるよう頼んだ。その音をテープで録音しようと思ったのだ」

10月。ブライアンは自宅で開いたディナーパーティーで友人やレコード会社関係者に録音した曲を聞かせてお披露目した。「音楽的なコメディになるんです。アルバム全体が昔の西部へのタイム・トリップになります。文字通りアメリカの風物です。おもしろいユーモアもたくさん入っています。ユーモアだらけの壮大なトリップになると思っています。曲の間に話し声や笑い声さ入るんです」と説明したが、これまでとあまりに違う音の質感に一同はあっけにとられ、沈黙が続いたという。

「ビーチ・ボーイズ(の他のメンバー)がツアーから戻り、僕が書いた曲を聞きはじめたが、彼らの期待は一曲ごとに怒りに変わっていった。僕は重罪を犯していた。ボーイズのスタイルを破壊していた。彼らは、曲の構成とシンプルな帰結につながるポップ・アルバムの常套的なアプローチにまっ向からチャレンジする音楽を聴き、びっくり仰天した。僕はアートを作ることを第一に考えた。僕はとても苛立った」

それでもブライアンとヴァン・ダイクは創作活動を続けた。マリファナ、LSDに飽き足らず、ついにデスビュートルという覚せい剤を大量に入手。迷うことなく、惜しみなく、自らを消費した。

同じ月、「スマイル」からの先行シングルとなる「グッド・バイレーション」が発売された。最後の編集を終えたブライアンは音を聞き「これは本当にショッキングな曲だぞ」と漏らしたが、メンバーは当惑。ブルース・ジョンストンは「世界的な大ヒットになるか、ビーチ・ボーイズが消えるか、どっちかだな」と洩らしたという。

皮肉にも、その予言はどちらもの中する。アメリカ、イギリスなど世界各地でナンバーワンになり、シングル最大の収益をもたらした。勢いを得て、その年の暮れに行われた英国「メロディーメーカー」誌のファン投票では、ついにビートルズを抜いてトップに立つ。しかし、そのビーチ・ボーイズが「自殺を図る」時も近づきつつあった。

ニューアルバムのタイトルは「ダム・エンジェル」から「スマイル」へと変更。機が熟したと考えたブライアンはいよいよ「スマイル」の核をなす組曲「エレメンツ」に着手する。地・風・火・水の4部構成が予定された曲の第3部、火のパートがハイライトになるはずだったのだが...

その「ファイアー・セッション」で事件は発生する。

## 神無月才生(かんなづき・さいせい)

音楽・映画評論家。1969年生まれ。英米のロック・ミュージックや香港映画シーンの切り口鋭い批評で知られる。コアな映画ファンの間では彼のホームページが大人気を博している。

神無月才生のホームページ <http://plaza.harmonix.ne.jp/~skz/>

## 「助けてもらう力」 安高真弓(ウィメンズオフィス・サーブ)

2月にハルエさんと二人でサンフランシスコに施設の視察に行った時のことです。東京まで戻ってきて、「東京の人って、こんなに親切だったっけ?」と思うことが何度もありました。

時差ぼけの頭でホテルにチェックインしたあと、ごはん党の私は一口だけでも米を食べたいと駅前のデパートに買い物に行きました。到着した時間が遅かったので、店の入り口に辿り着いた時には蛍の光が流れ始めました。「ああー、ごはんが遠ざかるー」と惣菜コーナーに走りましたが、片付けられてしまったあとで何もありません。「弁当やおにぎりのような高級品でなくてもいい、白ごはんだけでもなんとか!」と、帰る準備をしていたお店の人に「白ごはんだけでもいいんですけど...」と、声をかけました。私の顔には「米」と書いてあったに違いありません。事情を話すと、「そりゃ食べたいよね。中味は選べないけど、いい?」と、ほかほかのご飯でおにぎりを作ってくれたのです。「あったかいうちに食べてね。」と渡されたおにぎりの美味しかったこと!

地方出身の私にとっては、初めて上京した時に圧倒された東京のテンポの速さや煩雑とした感じは強烈でしたし、道を尋ねてもろくに教えてもらえなかった苦い経験から「東京の人は、不親切」というイメージを強く持っていました。でも、思い返してみると、今回の視察旅行中だけでも羽田成田間の路線図と時刻表をもらったり、一人では持ち運べないほどの重量になってしまったトランクを駅員さんやホテルのフロント係の方が運んでくれたり、あまりの寒さに入った地下で道に迷って随分長い距離を一緒に歩いてもらったりと、親切にしてくれることばかりでした。

理由は簡単。東京の人がやさしくなったのではなく、私自身のあり方が変わったのです。以前の私は、大ケガから復活した経験もあって「一人でするようにならなくちゃ」と、とても肩に力が入った生活をしていました。手伝ってもらうことはもちろん、「できない」と言うことも何かをお願いすることも、今考えると稀でした。回復を目指す人たちとのお付き合いの中で、みんなが実践している「正直になること」を、私も学んだのでしょう。

駅員さんやホテルの人も仕事だから親切にしてくれたのではなく、私が「困っています」と正直に話したので、それぞれできることをして力を貸してくれたのだと思います。モノや誰かに依存することは結局自分を苦しめますが、自分の必要としている援助を受けることは自分を楽にします。必要なことをしてもらって「ありがとう」と感謝できる関係は、軽やかで気持ちのいいものです。助けてもらう力は、「感謝できる能力」とワンセットでもありますね。

ほかほかのおにぎりは私の米欲求を満たしてくれただけでなく、助けてもらう力がついたことを気づかせてくれました。



MESSAGE

# APARI藤岡 アウェイクニングハウス



## アウェイクニングハウスの各プログラム

アウェイクニング・ハウスは、アジア太平洋地域アディクション研究所（APARI）が運営している薬物依存症からの回復のためのリハビリ施設です。

回復のためのプログラムは、自助グループ（NA＝ナルコティクス・アノニマス）の手法を取り入れたグループ・セラピーが中心です。入寮者が全員参加するミーティングを毎日行っているほか、夜には地元で行っている地域のNAミーティングに参加しています。

このほか、入寮者が自主参加するかたちで、スポーツ・プログラムや農作業、陶芸、ボランティア活動など、さまざまなプログラムを行っています。

薬物依存症になる人のほとんどが、対人関係が苦手で自分だけの世界に引きこもったり、なにかに依存することで心の葛藤を解決しようとする傾向を持っています。施設では、同じ苦しみと闘う仲間をつくることで孤独感を解消しながら、ミーティングで正直に自分の話をすることで薬物依存に陥った自分自身の心の問題を内省してもらっています。

東京からJRと車で2時間半。群馬県藤岡市の自然の山々に囲まれた施設で、薬物乱用で荒廃した精神状態を安定させ、病的依存から回復・自立できるような環境と援助を提供しています。



スポーツプログラム



ミーティング風景



農作業プログラム



陶芸プログラム



## APARI藤岡研究センター

〒375-0047

群馬県藤岡市上日野2594番地

電話 0274-28-0311 FAX 0274-28-0313

### 【入寮条件】

- 1、薬物依存から回復・自立をしようとしている本人
- 2、男性（年齢制限はありません）

### 【入寮期間】

3ヶ月、6ヶ月、12ヶ月の目安はありますが回復の度合いは個人差があるため特に定めません。

### 【入寮費】

月額16万円（生活保護受給者は応相談）

内訳	施設使用料（共益費含む）	¥60,000
	食費	¥30,000
	生活費	¥35,000
	プログラム・カウンセリング	¥35,000

### フェロシップ・ニュース（第七号）

2003年6月1日発行

定価 500円（年間購読料 5000円）

発行 APARI東京本部

〒110-0015

東京都台東区東上野6-21-8

サニーハイツ東上野1F

電話 03-5830-1790 FAX 03-5830-1791

Email [apari@tokyo.email.ne.jp](mailto:apari@tokyo.email.ne.jp)

<http://www.ne.jp/asahi/npo/apari/>